PROGRAMME
REPORT

India

文部科学省委託平成30年度初等中等教職員国際交流事業

インド教職員招へいプログラム
実施報告書

2018
10.7-10.14

文部科学省委託 平成３０年度初等中等教職員国際交流事業

インド教職員招へいプログラム
実施報告書

東京都・神奈川県・山梨県

2018 年 10 月 7 日(日) ― 10 月 14 日(日)

公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日印間の国際交流事業としては、2016 年から国際連合大学の主催する国際教育交流事業の一環として、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省（MHRD: Ministry of Human Resource Development）、インド環境教育センター（CEE: Centre for Environment Education）の協力のもと「インド教職員招へいプログラム」が始まり、2017 年度までに 29 名のインド教職員を本邦に招へいしました。

第 3 回となる今回のプログラムは、文部科学省委託事業「平成 30 年初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2018 年 10 月 7 日から 14 日まで、インドの小・中・高等学校の現職教職員等 14 名を日本に招へいしました。参加者は、日本の初等中等教育についての講義、学校や文化施設の訪問、日本教職員との教育交流会等を通して、日本の教育制度や持続可能な開発のための教育（ESD）の実践および日本の文化・伝統についての理解を深めるとともに、両国間の相互理解と友好促進に貢献しました。

実施にあたりましては、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省、インド環境教育センター、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多くの方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2019 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

１．プログラム概要 ……5

２．実施内容・訪問記録 ……15

３．コメントと提案 ……35

インド教職員 ……35

受入機関 ……50

事業担当者 ……55

付録

文部科学省講義資料 ……59

インド教職員によるプログラム報告 ……67

過去のプログラム実績 ……79

１．プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をミッションとして、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、2001 年より日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で教職員の国際交流事業を行ってきました。

日本とインドとの間の国際交流事業としては、2016 年より「インド教職員招へいプログラム」が文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省（MHRD）、インド環境教育センター（CEE）の協力のもとで始まりました。第 3 回となる今年度は、2018 年 10 月 7 日（日）から 14 日（日）までの 8 日間に渡り、インド共和国から初等中等教育教職員 15 名を本邦に招へいします。

2. 目的

本プログラムは、下記の活動を通じて教職員が相手国に対する理解を深め、お互いに学び合い、さらに自国の教育現場において国際理解教育を含む持続可能な社会への取り組みを促進することで、ひいては日印両国の相互理解と友好の促進および持続可能な社会の実現に繋げることを目的としています。

3. 期待される成果

プログラムの成果として、教職員が自国の教育現場においてプログラムからの学びを児童生徒に還元すること、日本とインドの学校間の持続的な国際交流を育むこと、国際理解教育を含む持続可能な社会への取り組みを推進する担い手となることなどが期待されています。

4. 活動内容

- 日本の教育制度および教育政策についての研修
- 日本の学校およびその他の教育・文化施設の視察
- ESD（持続可能な開発のための教育）を含む特色ある取り組みの視察
- 教職員および児童生徒との交流・意見交換

5. 日程

日付	日程	訪問先	活動
10 月 7 日（日）	第 1 日	デリー	デリー出発
10 月 8 日（月）	第 2 日	成田	日本到着、オリエンテーション
10 月 9 日（火） ｜ 10 月 10 日（水）	第 3-4 日	東京近郊	文部科学省表敬訪問、講義 学校訪問
10 月 11 日（木） ｜ 10 月 12 日（金）	第 5-6 日	神奈川県 山梨県	学校訪問 自然文化施設訪問
10 月 13 日（土）	第 7 日	東京近郊	日印教職員交流会、報告会 閉会式、レセプション
10 月 14 日（日）	第 8 日	成田、デリー	日本出発、デリー着

6.参加者数

14 名

7. 参加資格

(1) インド共和国の国籍を有すること。
(2) 所属する学校等からの推薦を受けた、インド共和国の初等中等教育（初等学校・上級初等学校・中等学校・上級中等学校）もしくはノンフォーマル教育センターの教職員であること。（教育行政官及び教育専門家を含む）
(3) プログラムに参加中、積極的に日印交流に取り組む姿勢を持つもの。
(4) プログラム参加後、教育現場において国際理解および持続可能な社会の推進に取り組む姿勢を持つもの。
(5) 健康で、プログラムの全日程に参加が可能であること。
(6) 英語での会話が可能であること。

なお、参加者は以下の者が好ましい。

① 45 歳以下で教員経験 3 年以上の者。
② 国際理解教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、SDGs（持続可能な開発目標）等に高い関心を持つ者。
③ 日本の教員、児童生徒、学校との交流を希望している者。

8. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。（※下記以外の経費は参加者が負担することとする。）

(1) 往復航空運賃
インド国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。
(2) 宿泊と食事
プログラム期間中の宿泊（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。
（食事が提供されない場合については食費を支給する。）
(3) 日本国内の移動旅費
プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

9. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

10. 通訳

プログラム期間中は原則として日本語と英語間の逐次通訳が行われる。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊先
10 月 7 日（日）	21:25	デリー－東京（AI306）	機中泊
10 月 8 日（月）	08:45	東京（成田国際空港）到着	新宿ワシントンホテル 〒160-8336 東京都新宿区西新宿 3-2-9 Tel: 03-3205-1111
	11:45-12:45	昼食	
	13:00-14:00	オリエンテーション（在日本国インド大使館）	
	15:00	ホテル到着、チェックイン	
10 月 9 日（火）	09:15	ホテル出発	
	10:00-12:00	文部科学省表敬訪問・講義	
	12:30-13:30	昼食	
	13:50-16:30	筑波大学附属駒場中学・高等学校訪問	
	17:00	ホテル到着	
10 月 10 日(水)	08:30	ホテル出発	
	09:00-13:30	目黒区立五本木小学校訪問	
	13:30-14:20	昼食	
	14:30-16:00	五本木住区センター児童館訪問	
	17:00-19:00	ホテル到着、情報共有会	
10 月 11 日(木)	08:45	チェックアウト、ホテル出発	山岸旅館 〒401-0301 山梨県南都留郡富士河口湖町船津 4030-1 Tel: 0555-72-2218
	10:00-15:10	神奈川県立神奈川総合産業高等学校訪問（昼食含む）	
	15:30-16:30	JAXA 相模原キャンパス見学	
	18:15	ホテル到着、夕食	
10 月 12 日(金)	08:30	チェックアウト、ホテル出発	新宿ワシントンホテル 〒160-8336 東京都新宿区西新宿 3-2-9 Tel: 03-3205-1111
	09:00-13:30	エコツーリズム体験（昼食含む）	
	13:45-15:30	西湖いやしの里根場見学	
	16:00-16:30	河口浅間神社見学	
	18:30	ホテル到着、チェックイン	
10 月 13 日(土)	09:15	ホテル出発	
	09:30-17:30	日印教育交流会、プログラム報告会（昼食含む）	
	18:00-19:30	プログラム閉会式・歓送レセプション	
10 月 14 日(日)	07:15	チェックアウト、ホテル出発	
	09:00	成田国際空港到着	
	11:15	東京－デリー（AI307）	
	17:00	インディラ・ガンディー空港到着	

参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	科目
I-01	Santosh Raghunath Sutar	Center for Environmental Education	Regional Director	環境教育
I-03	Manjusha Sharma	Rajkiya Pratibha Vikas Vidyalya	Trained Graduate Teacher	科学
I-04	Ishwant Kaur	Demonstration Multi-purpose School, Regional Institute of Education	Vice Principal	生物
I-05	Jamna Prasad Ahirwar	Demonstration Multipurpose School, Regional Institute of Education	Primary Teacher	環境教育
I-06	Anil Kumar Singh	National Institute of Open Schooling	Deputy Director (Capacity Building Cell)	平和教育/古代史
I-07	Tarun	National Institute of Open Schooling	Assistant Director(Academic)	社会科学
I-08	Ashminder Singh Bahal	National Institute of Open Schooling	Director	政治科学/国際関係
I-09	Rajendra Kumar Nayak	National Institute of Open Schooling	Academic Officer/Teacher	数学
I-10	Anshul Kharbanda	National Institute of Open Schooling	Academic Officer	会計/ビジネス/ジェンダー/環境
I-11	Urvashi Soni	Jawahar Navodaya Vidyalaya	Post Graduate Teacher	物理
I-12	Ravi Kant Mishra	Jawahar Navodaya Vidyalaya	Post Graduate Teacher	化学
I-13	Santosh Bahuguna	Jawahar Navodaya Vidyalaya	Post Graduate Teacher	物理
I-14	Basavaraju Giriyapura Somashekharappa	Jawahar Navodaya Vidyalaya	Post Graduate Teacher	生物
I-15	Vikram Yadav	Directorate of Education	Lecturer	生物

プログラム関係機関

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology（MEXT）／
文部科学省

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959
〒100-8959　東京都千代田区霞ヶ関 3 丁目 2 番 2 号
TEL: +81-3-5253-4111　　URL: http://www.mext.go.jp

Mr. NARA Satoshi
Director, International Affairs Division, Minister's Secretariat
奈良　哲
大臣官房国際課　課長

Mr. TERASHIMA Shiro
Director, Office for International Strategy Planning, International Affairs Division, Minister's Secretariat
寺島　史朗
大臣官房国際課　国際戦略企画室　室長

Mr. FUKUMOTO Hitoshi
Specialist, International Affairs Division,Minister's Secretariat
福本　倫
大臣官房国際課　専門職

Embassy of India ／インド大使館

2-2-11 Kudan-Minami, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0074
〒102-0074　東京都千代田区九段南 2-2-11
TEL: +81-3-3262-8520　URL: http://www.indembassy-tokyo.gov.in/home.html

Mr. Bramha Kumar
Counsellor (Political & IEC)
ブラムハ　クマール
参事官（政治＆情報･教育･文化）

Mr. Karan Yadav
Second Secretary (Political & IEC)
カラン・ヤダブ
二等書記官（政治＆情報･教育･文化）

学校訪問でご協力いただいた方々

筑波大学附属駒場中・高等学校

〒154-0001　東京都世田谷区池尻 4-7-1

TEL: 03-3411-8521　　URL: https://www.komaba-s.tsukuba.ac.jp/

林　久喜	大野　新	梶山　正明	山田　忠弘
校長	副校長	副校長	研究部長　主幹教諭

目黒区立五本木小学校

〒153-0053　東京都目黒区五本木 2－24－3

TEL: 03-3711-8494　　URL: http://www.meguro.ed.jp/meghngeh/

深谷　千恵	高橋　圭介	鈴木　陽子
校長	副校長	指導教諭

五本木住区センター児童館

〒152-0001　東京都目黒区中央町 2-17-2

TEL: 03-3792-9130

URL:http://www.city.meguro.tokyo.jp/shisetsu/shisetsu/jidokan_club/jidoukan/gohongi/

篠崎　省三	佐藤　栄美子
目黒区役所子育て支援課長	館長

神奈川県立神奈川総合産業高等学校

〒252-0307　神奈川県相模原市南区文京 1-11-1

TEL: 042-742-6111　http://www.kanagawasogosangyo-h.pen-kanagawa.ed.jp/

梶原　健司	佐藤　弘之	望月　浩明
校長	副校長	講師

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO（ACCU）／
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1-32-7F, Kanda Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051 Japan
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-32-7F
TEL: 03-5577-2853　　FAX: 03-5577-2854
Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp　URL: http://www.accu.or.jp

Mr. TAMURA Tetsuo
Director-General
田村　哲夫
理事長

Ms. SHINDO Yumi
Director, International Educational Exchange Department
進藤　由美
国際教育交流部　部長

Ms. FUJISAWA Yayoi (main person in charge of programme)
Programme Officer, International Educational Exchange Department
藤澤　弥生（本プログラム主担当）
国際教育交流部　プログラム・オフィサー

Ms. TAKAMATSU Ayano (vice person in charge of programme)
Programme Specialist, International Educational Exchange Department
高松　彩乃（本プログラム副担当）
国際教育交流部　プログラム・スペシャリスト

Mr. OKANO Koichi
Programme Specialist, International Educational Exchange Department
岡野　晃一
国際教育交流部　プログラム・スペシャリスト

Ms. ITO Tae
Programme Specialist, International Educational Exchange Department
伊藤　妙恵
国際教育交流部　プログラム・スペシャリスト

Ms. KAWAGUCHI Eriko
Programme Officer, International Educational Exchange Department
河口　枝里子
国際教育交流部　プログラム・オフィサー

２．実施内容・訪問記録

10 月 8 日（月）オリエンテーション（東京都）

インド大使館での集合写真

団長の Mr. Ashminder Singnh Bahal 率いる 14 名の訪問団は 2018 年 10 月 7 日の夜にデリーを出発し、翌日 8 日の朝に成田へ到着し、まず公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）によるオリエンテーションを受けた。今回のオリエンテーションは、東京都九段下にある在日インド大使館の協力により大使館にて行われた。

オリエンテーションでは、プログラム日程の説明、滞在中の注意事項の説明、ACCU スタッフの紹介等があった。また、在日インド大使館の参事官（政治＆情報・教育・文化分野）である Mr. Bramha Kumar と、二等書記官の Mr. Karan Yadav から訪問団に向けて挨拶があり、訪問団には今回の日本滞在を通して多くの事を経験し、日本の様々な良い点をぜひ学んで欲しいと述べた。

10 月 9 日（火）文部科学省表敬訪問（東京都）

ESD とユネスコスクールに関する講義

文部科学省の表敬訪問では、はじめに大臣官房国際課国際戦略企画室長の寺島史朗氏が挨拶をし、インドと日本の交流には長い歴史があること、そして特に近年は両国の首相が毎年サミットを開いており、強い友好関係を築いていると述べた。訪問団には今回のプログラムを通して、ESD（持続可能な開発のための教育）やユネスコスクールなどの特色ある教育活動の見学を通して良いアイディアを得るほか、教職員の交流会で出会う日本の教職員と、帰国後も長く続く友好関係を築いて欲しいと述べた。

続いて、初等中等教育局国際企画調整室の神定舞氏より、日本の初等中等教育の概要に関する講義が行われ、学校体系、教育制度、教育行政、教育委員会制度、日本の教育の特徴、学習指導要領の変遷等についての説明があり、学習指導要領の説明では現行の学習指導要領の理念として「学力の三要素」と「生きる力」について触れた。

その後、国際統括官付（日本ユネスコ国内委員会事務局）専門官の徳留丈士氏より、日本の ESD とユネスコスクールに関する講義が行われ、ESD の背景、概念、国家カリキュラムにおける位置づけ、学校での実施事例、コンソーシアム、UnivNet 等について説明した。

プログラム参加者の興味・関心

・環境問題の教育への組み込みについては、どの機関の責任で行われているのか。
・カリキュラムや教師の間で、持続可能性についてはどのように述べられているか。
・世界に対応できる自立した人材を育成するためにどのような政策を策定しているのか。
・恵まれない子どもたちの底上げに対し、どのようなプログラムを施行しているのか。
・遠隔地に住む人々への教育アプローチについて知りたい。

・日本の高い識字率を達成するために何が日本の教育制度にとって主要な戦略であったか。
・戦後日本が先進国になりえたうえで、教育制度における主要な要素は何が考えられるか。
・教育制度はどのくらいの頻度で改定され、近年の主要な変化としては何があげられるか。
・日本の学校教育ではどのように価値観の教育が盛り込まれているのか。

・職業教育は日本の教育制度においてどのような位置づけか。
・科学教育においてモデルとなる政策は何か。
・理科と算数／数学のカリキュラムを作成する際にどのような懸念や問題があるか。

・高等教育においてどのような教育方法や成績評価方法が用いられており、またそれがどのような効果を発揮しているか。
・高等教育の教員について、教員養成など様々な方針について知りたい。
・日本のスポーツ分野における活躍が目覚ましいが、生徒たちはいつからトレーニングを始めるのか。

Q&A より（抜粋）

Q：道徳の時間や部活動は専門の教員が教えるのか、それとも一般の教員か？
A：道徳は一般の教員が教えている。部活動も基本的には同様に一般の教員が担当している。

Q： 生きる力を育む教育は素晴らしい。ちなみに、例えば理解力や想像力などはどう評価しているのか。また、それらを中学・高校でどう生かしていくのか？
A: 詳細については配布資料をご覧いただきたいが、どのような観点で評価するかについては、基準を国が設定して運用している。

Q： 私の組織はインドで通信教育を行っており、遠隔地に居住する子供や様々な障害を持った子供を生徒としているが、日本の特別支援教育はどのように行われているのか？
A：日本では障害のレベルに応じた教育をしており、障害の種別に特別支援学校があるほか、障害が軽い子供については通常の学校で特別支援学級や通級による指導で教えている。

Q： ユネスコスクールを展開するのに何か困難はあるか？
A： ESD について知らず、何をしたらいいかわからない教員も多いという問題がある。

10 月 9 日（火）筑波大学付属駒場中学・高校訪問（東京都）

訪問スケジュール

時間	内容
13:50-14:10	挨拶、記念品交換
14:10-15:00	授業見学
15:00-15:45	質疑応答
15:45-16:30	部活動見学、施設見学

学校の特色、特記事項

東京都世田谷区にある1947年創立の国立の男子校で、教育目標は「自由・闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」ことで、「学業」「学校行事」「クラブ活動」の３つの教育機能を充実させ、生徒の全面的な人格形成を促進・発達させることを教育方針としている。2002年より「スーパーサイエンスハイスクール」研究開発校に指定され、理系教育に重点を置いている。1959年にユネスコ国際共同学校計画に参加しており、台湾や韓国の学校との国際交流も盛んである。

訪問当日は、英語・数学・物理の授業見学、そしてバスケットボール部・化学部・鉄道研究部などの部活動見学をした。化学部の見学では、生徒が研究・開発した物のデモンストレーションが行われ、特に視覚障害者のための機械に関する説明などに訪問団は熱心に耳を傾けていた。また、訪問時期は体育祭・文化祭の準備期間であり、生徒による準備の様子も見られた貴重な機会だった。また、体育祭の時に色でチーム分けすることから、髪の毛を赤・黄色・青など様々なチームカラーに染めている生徒も見られた。トップの進学校でありながら、実に自由な校風や教師と生徒の距離の近さは、インドの先生にとって驚きであったようだ。

英語の授業見学

物理の授業で生徒に質問をするインド人教師

生徒が開発した機械の説明

バスケットボール部の見学

Q&A より（抜粋）

Q：色々な授業を見たが、先生の自由度があり生徒も自由な感じであった。集中力が足りないと思われる生徒に対してはどのような指導をしているのか？
A：中学生に関しては指導してやらせているが、高校は選択性が強く、自主性に任せている部分が多い。好きなことは一生懸命やれというスタンスである。

Q：生徒は両親から色々言われるなどしてプレッシャーを感じているのだろうか？
A：東京大学に入ることを期待されており、それを目指す生徒が多いため、結構色々と言われていると思う。生徒自身がプレッシャーを感じているのは事実だと思う。

Q：義務教育といえども、一定のレベルに達しない生徒はどうするのか？
A：日本では義務教育の小学校と中学校については自動進級制なので、進級させてしまうが、高校だと単位を落とすと進級できないので、留年しないように指導はしている。

Q：環境に関する授業やプログラムはあるか？
A：生物部や農業部がある。また、中学 1 年と高校 1 年のときに、登山をする機会があり自然観察を行っている。

Q：部活動というのはどのように加入するのか？
A：生徒自身が興味のある部活動を選んで入るというものである。

Q：教員に対するトレーニングとその頻度を教えてほしい。
A：教員は 10 年ごとに教員免許更新研修を 30 時間受け、最新の授業を経験する。また年に一回、公開授業をしており、他の学校の教員の方にも授業の様子を見てもらっている。

Q：財政的な面をお聞きしたいが、政府から援助はあるのか？
A：国立大学附属なので職員は大学から給与を受けている。また、スーパーサイエンスハイスクール指定校なので、国からも補助金をもらっている。

記念品交換

学校前で記念撮影

10 月 10 日（水）目黒区立五本木小学校訪問（東京都）

訪問スケジュール

時間	内容
9:00-9:40	挨拶、記念品交換、学校説明
9:40-12:15	授業見学・特別支援学級見学
12:15-13:05	昼食交流
13:10-13:30	質疑応答

インド式算数を教えるインド教職員

学校の特色、特記事項

目黒区にある創立 87 年の公立の小学校で、2010 年にユネスコスクールに加盟して ESD に取り組んでおり、特に環境教育が活発な学校して有名である。2016 年からは ESD の重点校である「サステイナブルスクール」推進校としても活動している。学校には、武蔵野の雑木林の名残である「五本木の森」があり、生徒の環境教育の活動場所となっている。学区内には図書館や児童館があり、教育環境に恵まれている。

訪問当日、訪問団はインド各地の言語で書かれインドの模様で飾られたウェルカムボードで暖かい歓迎を受けた。授業見学では、美術・音楽・道徳などのインドでは珍しい授業も見学する機会があり、授業の様子に見入っていた。算数の授業ではインド教職員が日本の生徒にインド式算数について説明する場面もあった。

そして総合学習の授業では、学校で取り組んでいる環境活動について日本の生徒が発表し、インド教職員からも日本の生徒に対してインドの文化や自然・環境保護について紹介する授業が行われた。その後の給食の時間には生徒に手を引かれて各学級に行き、生徒と一緒に食事をする場面もあり、生徒との直の交流に目を輝かせる光景が見られた。

また、特別支援学級や通常学級での支援員による学習サポートの様子を見学する機会もあり、インドとは異なる日本の特別支援教育について知る機会となった。成績の良い生徒だけを伸ばすのではなく、学習障害を持つ生徒もサポートするという日本の教育の平等性に大変感銘を受けたという言葉がインド教職員から多く聞かれた。

生徒による環境活動の発表

給食の時間の生徒との交流

記念品交換。後ろにあるのは生徒が作ったインド模様のウェルカムボード

Q&A より（抜粋）

Q：特別支援学級で教えるのに必要な資格はあるか？
A：特に特別な資格は必要はなく、教員免許があれば教えられる。特別支援学校の教員免許は必須ではない。

Q:特別支援学級の位置づけは？教えるのは困難だと思うがどのような工夫がされているか？
A：特別支援学級は、通常のクラス以外のエキストラだと捉えることができる。教える際の工夫としては、例えば視覚障害を抱えている子供に対しては、見る力を強化することで改善を促したりする。

Q：成績表の採点はテストだけでおこなうのか？
A：テスト以外にもノートに書いた自分の考えや宿題なども考慮に入れて評価している。

Q：給食は毎日出るのか？
A：毎日出る。

Q：二人で教えているクラスあったが、生徒何人に対して教員一名なのか？
A：授業するのは基本的に一名の教員である。二人目の教員は、学習サポートをする教員か特別支援サポートの教師かのいずれかである。

Q：入学試験はあるのか？
A：公立の学校なので、地区に居住している子どもは誰でも入学できる。

授業見学の様子

10 月 10 日（水）五本木住区センター児童館訪問（東京都）

訪問スケジュール

時間	内容
14:30-15:00	挨拶、館内案内
15:00-15:30	子どもスタッフ会議見学
15:30-15:45	おやつの時間の見学
15:45-16:00	質疑応答

インドのダンスを教える訪問団

施設の特色、特記事項

1984 年に五本木住区センター内に設立された公立の児童館で、五本木小学校の近隣にある。住区センターは地域住民が施設運営をし、住区住民会議で地域福祉や児童の健全育成にむけて活動しており、児童館は住民会議や小学校等と連携して、地域の大人と子どもをつなぐ行事や子供の見守り・理解を進めている。0～18 歳の児童と保護者がいつでも利用できる施設で、午前は乳幼児と保護者の交流の場となり、午後は小中学生の遊びの場となっている。学童保育クラブも併設しており、一般来館児と学童保育登録児が学校後の時間を一緒に過ごしている。

児童館には図工室・図書室・プレイルームなどの様々な施設があり、訪問団は各施設を見学して児童の遊びを見学した。その中で、インド教職員が児童と一緒にドッチボールや卓球をしたり、インド教職員が児童にインドのダンスを教えて皆で踊るという場面もあり、大いに盛り上がった。また、児童館では子ども達の話し合いで決め事をすることも大切にしており、地元のお祭りの準備のために児童が行う「子どもスタッフ会議」を見学する機会もあった。また、おやつの時間の見学では、インド教職員が数人に分かれて各テーブルに付き、色々な会話をしながら和気あいあいとした時間を過ごした。

一緒に卓球で遊ぶ

おやつの時間に児童と話すインド教職員

児童館にインドの仏像をプレゼント

Q&A より（抜粋）

Q：児童館はこの地区にいくつあり、何歳の子どもを対象としているか？
A：目黒区に 15 か所あり、0 歳から 15 歳までが対象となっている。午前中は赤ちゃんが来て、放課後は児童が来る。夏休みなどの休みの期間は 8:15~16:15 まで対応している。

Q：五本木小学校の生徒が多いのか？
A：五本木小学校の児童が多いが、他の小学校から来ている子もいる。

Q：児童館の利用は有料か？
A：一般来館児で遊びに来るのは無料。学童保育登録児の場合は基本的に月 8,000 円かかるが、中には支払いを免除されている場合もある。一般来館児と学童保育登録児の違いは、学童保育登録児は出欠を管理していることやおやつを提供している点が一般来館児とは違う。

図書室・図工室・プレイルームなどを見学する訪問団

インドのダンスを子供たちにレッスン

10 月 11 日（木）神奈川県立神奈川総合産業高校訪問（神奈川県）

訪問スケジュール

時間	内容
10:00-10:40	挨拶、記念品交換、学校説明
10:55-12:35	授業見学、授業参加
12:35-13:20	昼食交流
13:25-14:40	授業見学、施設見学
14:40-15:00	質疑応答

歓迎を受ける訪問団

施設の特色、特記事項

同校は神奈川県相模原市にある公立の総合産業科高校で、科学技術の高度化やグローバル化に応じ、共通教科の科目に加えて「工学系、情報系、環境バイオ系、科学系、リベラルアーツ分野」の 4 系列 1 分野の専門的な科目を設置しており、産業を幅広く学び、国際的な視点を持った創造的な科学技術系の人材育成を目指している。また、生徒自らの興味・関心・進路に応じた学習計画を作成・実践できるよう単位制の学習システムをとっている。科学技術・理数教育を重点的に行う学校として 2009 年より 7 年間スーパーサイエンスハイスクールの指定を受けた。

訪問当日は、インドの訪問団が到着すると、玄関で待っていた生徒や先生方から歓迎の挨拶とプレゼントで暖かな歓迎を受けた。学校概要の説明では、生徒自らが作成し学校説明会で使用している学校紹介ビデオを見た。授業見学・施設見学では、普通科目の授業に加え、機械の実習授業や CAD 製図の授業、ガス溶接室、旋盤室、自動車の分解・組み立てをする実習室などを見学し、様々な専門設備を学校が備えていることに訪問団は非常に驚いていた。

授業参加では、国際理解の授業で日本の生徒がインド教職員に対して日本の習慣・行事・技術などについて英語でプレゼンテーションをし、インド教職員もインドの文化について紹介する授業が

自動車実習室の見学

ガス溶接室の見学

インド式数学を教える訪問団

行われた。インドの文化紹介では、訪問団と生徒が 4 つのグループに分かれて、インドのダンス、ヨガ、インド式数学、インドの多様な言語について、訪問団が生徒に詳しく教えた。インド教職員の授業を受けた生徒からは、「100 分の授業でも時間が少ないと感じた。」「インドに全く興味が無かったが、今回の機会をきっかけにインドに興味を持った。」「インドの方は民族色が強いと思っていたが、話してみると明るく気さくで面白い方達だということが分かった。」という声が聞かれ、日本の生徒にとっても良い異文化交流の機会となったようだった。

昼食交流では、訪問団は国際交流クラブの生徒や先生方と一緒にインドカレーを食べながら和気あいあいとした雰囲気の中で交流を深めた。訪問団は来日前、日本の学校は厳しくて自由度が低く生徒にとってストレスフルなものを想像していたようだが、実際に見学してみて、日本の学校生活の自由度の高さや先生と生徒との距離の近さなどに驚き、日本のクリエイティビティは自由な学校生活から育まれているのかもしれないと言うインド教職員もいた。

生徒にヨガを教える訪問団

昼食を食べながら生徒と交流

Q&A より（抜粋）

Q：定時制は何時から何時まで授業があるのか？
A：定時制は夜間で、授業は 17:30～20:50 で、20:50～22:00 は部活動の時間となるので、昼間働きながら学ぶこともできる。

Q：定時制の卒業までにかかる年数について。また、どのような学位取得が可能か？
A：単位制なので、3 年間以上で 74 単位以上修得できれば卒業となる。卒業単位を取れば、高校卒業資格を取得できる。

Q：入学する年齢についてと入試の有無。
A：全日制の入学年齢は 15 歳となる。入試は公立高校なので統一入試があり、誰でも受験できるが、ある一定の合格ラインをクリアした生徒が入学できる。

Q：実習室にある解体・組み立て用の自動車はどうしたのか？
A：企業から教材用にと寄付された車で、電気自動車の仕組みについて学ぶ教材となっている。

10 月 11 日（木）JAXA 相模原キャンパス訪問（神奈川県）

「はやぶさ」の説明を受ける訪問団

神奈川総合産業高校を訪問後、訪問団は学校近くの JAXA 相模原キャンパスを訪れた。JAXA（宇宙航空研究開発機構）は日本での宇宙開発利用の中核的実施機関で、同分野の研究・開発・利用を行っている。JAXA 相模原キャンパスには研究・管理棟、研究センター棟、ロケット・人工衛星・探査機と、そこに搭載する機器の開発や試験を行う施設などがある。訪問団は JAXA の機関概要説明を受けた後、宇宙科学探査交流棟で小惑星探査機「はやぶさ」の模型やロケットの実物展示を見学した。

10 月 12 日（金）エコツーリズム・ほうとう作り体験（山梨県）

ガイドさんの説明を熱心に聞く訪問団

訪問団は 10 月 11 日～12 日の一泊二日で山梨県富士河口湖町に滞在し、今回のプログラムのテーマの一つである環境教育の体験学習としてエコツーリズムを体験するほか、伝統工芸体験や神社訪問等を行った。訪問団は河口湖畔に着くと、都市部とは異なる自然豊かな地方の風景と世界遺産である富士山の美しさを目にして目を輝かせていた。

エコツーリズム体験は、NPO 法人・富士山ネイチャークラブのローカルガイドさんのもと、河口湖畔の緑豊かな青木ヶ原樹海で行われた。まず、エコツーリズムとは自然環境や歴史文化を体験しながら学ぶとともに、その保全にも責任を持つ観光のあり方であるという事や、持続可能な観光地づくりについて学んだ後、樹海を散策しながら樹海と富士山の成り立ちや植生・生息動物等についての説明を受けた。

訪問団には理科の教職員が多かったため自然環境に関する関心が高く、樹海の植生や動物等の説明に熱心に耳を傾けていた。また、富士山の噴火によってつくられた溶岩洞窟で、コウモリが生息する国指定天然記念物の「西湖コウモリ穴」の探検もし、とてもエキサイティングな経験ができたと喜んでいた。

青木ヶ原樹海の散策後、訪問団は西湖公民館に移動し、山梨の郷土料理であるほうとう作りを体験した。富士山ネイチャークラブのローカルガイドの方に作り方を教えてもらいながら和気あいあいとした雰囲気の中で料理を楽しみ、できあがったほうとうはお昼ご飯としていただいた。訪問団のほとんどがベジタリアンであったため、昆布で出汁を取った野菜ほうとうを作った。

緑豊かな青木ヶ原樹海

ヘルメットを被り洞窟に降りていく

ほうとうの麺づくりから始める

笑顔があふれる訪問団

10 月 12 日（金）西湖いやしの里根場訪問（山梨県）

ほうとう作りの後は、西湖の根場地区にある「西湖いやしの里根場」を訪問した。1966 年の台風被害で壊滅的な被害を受けた日本の茅葺屋根の集落を再現した施設であり、資料館やギャラリーがあるほか、様々な日本の伝統工芸が体験できる。訪問団は日本の原風景の中、茅葺屋根の古民家での絵付けやちりめん細工などの伝統工芸体験を楽しみ、伝統的な日本の暮らしを知る機会となった。

ちりめん細工体験

絵付け体験

兜を被った日本人の方と一緒に

伝統的な日本の村を散策

10 月 12 日（金）河口浅間神社訪問（山梨県）

山梨県での滞在の最後に、世界文化遺産に登録されている河口浅間神社を訪問した。訪問団は手水や二礼二拍手一礼などの参拝方法を体験しながら日本の宗教である神道について学んだ。多神教や自然崇拝という点など、ヒンドゥー教との共通点も見出した訪問団の中には拝殿で熱心にお祈りをする方もいた。

大鳥居と樹齢千年近い杉並木

手水のやり方を学ぶ訪問団

10 月 13 日（土）日印教育交流会

プログラム 7 日目となる 10 月 13 日（火）は、TKP 新宿カンファレンスセンターにて日印教育交流会が開催された。参加者は、訪問団 14 名と、公募によって日本全国から集まった日本の教職員 14 名の計 28 名であった。当日は下記のようなプログラムで実施した。

【午前の部　09:30～12:00】
・自己紹介（午前のグループ）
・インドの教育に関する講義
　National Institute of Open Schooling
　Ashminder Singh Bahal 氏
・グループディスカッション①

【昼食　12:00～13:15】

【午後の部　13:15～16:00】
・自己紹介（午後のグループ）
・平和で持続可能な社会に向けた教育活動の事例紹介
　①徳島県上板町立高志小学校
　　校長　武田國宏先生
　②インド環境教育センター
　　Santosh R Sutar 氏
　③日印音楽交流会　T.M. Hoffman 氏
・グループディスカッション②
・今後の教育活動案作り

この交流会は招へいプログラムの一環として、その目的である「インドと日本の相互理解と友好の促進、および持続可能な社会の実現」に向けて、教職員同士の学びあいや交流の場を提供するために行われた。交流を通してそれぞれの教育現場で国際理解教育や ESD などの平和で持続可能な社会に向けた教育活動を実施するための具体的なきっかけやインスピレーションを得ることを交流会のゴールに設定した。交流会の終わりにはその第一歩として、各教職員に今後の教育活動案について「プチ宣言」をしてもらった。当日の詳細は下記のとおりである。

午前の部は、まずはアイスブレイクとして一人 2 分間の自己紹介を行った。それぞれ自分の関心のある分野や明らかにしたい疑問点などを紹介し、時間内では足りないくらい熱心に情報交換を行った。

自己紹介の様子

自己紹介の後は団長のアシミンダール・シン・バハール氏により、インドの学校教育の概要に関するプレゼンが行われ、インドの学校制度、教育機関の種類、主な政策などに関する説明がなされた。その後、5～6人1グループで行われたグループディスカッションでは、日本の教職員からプレゼンの情報に基づいた質問も投げかけられたほか、下記のような意見交換がなされた。

＜グループA＞
・日本の高い識字率及び低い退学率の要因
・体験型学習の取り入れ方
・職業教育について
・奨学金給付状況
・教育現場でのICTの活用法

＜グループB＞
・インドの全寮制の学校について

＜グループC＞
・教育資金について
・教員の給与について

＜グループD＞
・インドの試験制度について（JEEというエンジニアリングの試験や、NEETというメディカル関係など）
・インドの進級制度について

＜グループE＞
・インドの遠隔地教育（主にe-learning）について
・貧困地域への教育支援

いずれのグループも、ディスカッション時間が足りないほど積極的な意見交換が行われた。日印の教職員ともに教育制度や教授法の違いに大変興味を示し、日本の発展した学習環境や学校制度、またインドの進んだSTEM教育・環境教育・遠隔地教育など、お互いに学び合える点は多かったようである。

午前の部が終了すると、一同は昼食のため新宿ワシントンホテルの地下一階にあるインド料理レストラン・ガンジーに移動し、インドカレーを食べながら水入らずの会話を楽しみ交流を深めた。

グループディスカッションの様子

インドカレーを一緒に食べながら交流

午後の部では、グループメンバーを入れ替えたため、まずは新しいグループで再度自己紹介が行われた。続いて、平和で持続可能な社会に向けた教育活動の事例紹介として、以下の3つのプレゼンテーションが行われた：

① 徳島県上板町立高志小学校校長武田國宏校長先生による「豚の飼育を通した『責任ある消費』からの学び」
② インド環境教育センターのサントシュ・R・スタール氏による「インドの教育現場における環境保護活動」
③ T.M.ホフマン氏による「日印交流における音楽の果たす役割」

各プレゼンテーションの後には質疑応答の時間が設けられ、ESDに向けた具体的なアプローチについて全体での議論が行われた。また、その後は小グループに分かれてESD等に関して話し合い、議論と交流を深めた。また、ディスカッションの合間には、リフレッシュのためにアンシュル・カールバンダ氏によるインドのヨガ＆呼吸法のショートレッスンが行われる場面もあった。

その後、一日の締めくくりとしてディスカッションを経て考えた各自の今後の教育活動案を「プチ宣言」として発表した。日本の教員からは「生徒たちに国際的な視野を身につけさせるためにまずは自分が様々なことに興味を持つようになる」、「インドの先生方とともに2050年の大人を育てる」、「インドの教育の長所を日本の教育制度に取り込みより良いものにする」、「つなげる・伝える・広げる・実践する」、「自国文化の学び直しと多文化交流」などの宣言がされた。

インドの教職員からは「生徒が責任ある地球市民になるよう教える」、「日本の礼儀正しさ、時間への忠実さ、優しさ、献身、責任感をインドに持ち帰りたい」、「国際理解のために教育分野での日印の協働を図っていきたい」、「教育の様々な分野で持続可能性を追求していきたい。日本の学校と定期的に交流を継続させたい」、などの宣言がされ、今後の交流への継続的な意欲が伺えた。

リフレッシュのためのヨガ＆呼吸法レッスン

今後の教育活動案の発表

10 月 13 日（土）報告会・閉会式

日印教育交流会が終了すると、訪問団の代表によるプログラムの報告を含むプログラム全体の閉会式が行われた。報告会は交流会と同じ TKP 新宿カンファレンスセンターにて行われ、閉会式は場所を移して新宿ワシントンホテルにて行われた。

訪問団による報告会では、各日程で経験したことについての感想が述べられ、それがどのように当初の関心事項と結びついたのか、そして結果として日本の教育制度から何を学び、一方でインドからはどのような点を日本の教育の参考できるのかといったことが発表された。日本の教育制度から学んだ点としては、総合的な学習の時間、文武両道、教師と生徒の距離の近さ、専門施設を備えた職業教育、スーパーサイエンススクール、特別支援学級、規律正しさ・時間遵守等が挙げられた。また、インドの教育で日本の参考にできそうな点として、遠隔教育／通信教育、高齢化社会が進む中でのヨガや高齢者介護といった教科の導入、インド式数学、科目としての環境教育等が挙げられた。

インド教職員側からの報告の後は、今回の訪問校である神奈川県立総合産業高等学校の梶原健校長より報告に対するコメントが送られ、ユネスコ･アジア文化センター国際教育交流部・進藤由美部長の閉会挨拶により報告会は閉会した。

閉会式は 18 時より新宿ワシントンホテルにて行われ、文部科学省大臣官房国際課国際戦略企画室長の寺島志朗氏、在日本国インド大使館参事官（政治＆情報・教育・文化）ブラムハ・クマール氏の挨拶によって開式した。

訪問団によるプログラム報告

集合写真

続いて、ACCU 参与の渡辺一雄氏により訪問団にプログラムの参加証明書が手渡された、その後に訪問団からも来賓や ACCU スタッフへ記念品の授与が行われた。その後、渡辺参与の乾杯の音頭によって歓談となり、一週間の感想や経験を共有し合った。歓談の後、代表団のアンシュル・カールバンダ氏より閉会挨拶が行われ、報告会・閉会式は終了となった。終了後もしばらくは写真撮影がはかどり、参加者からは安堵の笑みとプログラムの終了を惜しむ表情が伺えた。

ACCU 渡辺参与とアシミンダール訪問団長

歓談の様子

文部科学省の寺島氏、およびインド大使館のブラムハ・クマール氏による挨拶

色とりどりのサリーで着飾った訪問団

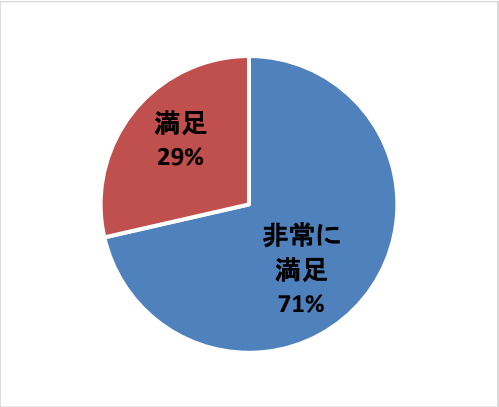
閉会挨拶をするアンシュル氏

３．コメントと提案

1. インド教職員
2. 受入校
3. プログラム担当者

1．インド教職員コメント（アンケート有効数：14）

◆質問 1．プログラム全体の満足度



A-01 Santosh R Sutar（非常に満足）
明確な目標、結果がありうまく計画されていた。本当の意味での交流プログラムでした。

A-04 Ishwant Kaur（非常に満足）
様々な教育文化施設を訪れたことで日本の教育と文化について多くの知識を得られました。

A-09 Rajendra Kumar Nayak（満足）
このプログラムによってインドと日本の教員間での理解と友情を育めました。

A-10 Anshul Kharbanda（非常に満足）
日本の文化や教育制度を知る良い機会となり、日本とインドの教員同士が情報と経験を共有できました。また、日本人の丁寧な振る舞いと類まれなもてなしに感銘を受けました。

A-14 Basavaraju Giriyapura Somashekharappa（非常に満足）
持続可能な開発のための教育について、学校での実践の見学を通してより理解できました。

◆質問 2．参加目的

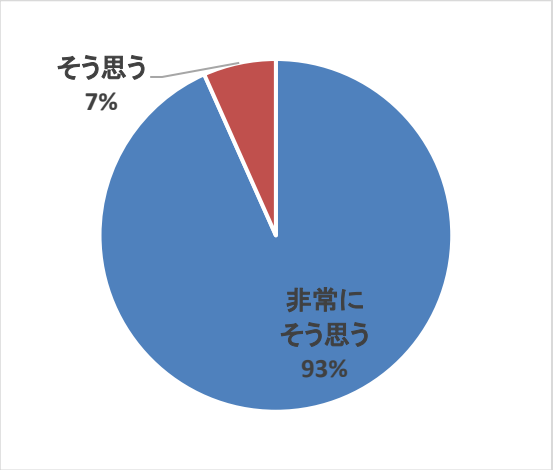
A-04 Ishwant Kaur
日本の教育制度と文化を理解し、日本の人々と学び合い、そしてそれを母国に持ち帰るため。

A-03 Manjusha Sharma
日本の学校ではどのように生徒を持続可能な社会の担い手として育成しているか知るため。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar
初等教育レベルでの持続可能な社会に向けた実践と方法について学ぶため。

A-11 Urvashi Soni
日本の教育の強さを知り、いかに技術大国になれたのかを知りたかったからです。

◆質問 3．参加目的は達成できたか



A-03 Manjusha Sharma
ユネスコスクールの訪問や今回の交流によって日本の教育制度と持続可能な発展に向けた視点を得ることができました。

A-04 Ishwant Kaur
プログラムを通して様々な学校や文化施設を訪れることができ、そして訪問先で人々と意見交換が出来ました。

A-09 Rajendra Kumar Nayak
学校での素晴らしい諸活動を見学するほか、校長先生・教員・生徒たちと交流し、協力関係の構築ができました。持続可能な社会に向けた日本のキャパシティーを感じました。

A-11 Urvashi Soni
様々な場所の訪問を通して、規律と正確さは日本の力であることを知りました。

◆質問 4．当初の目的以外で、このプログラムから得られたものはあるか

A-01 Santosh R Sutar
学校・教員・教育機関とのより強い協力関係を構築・拡大することができました。

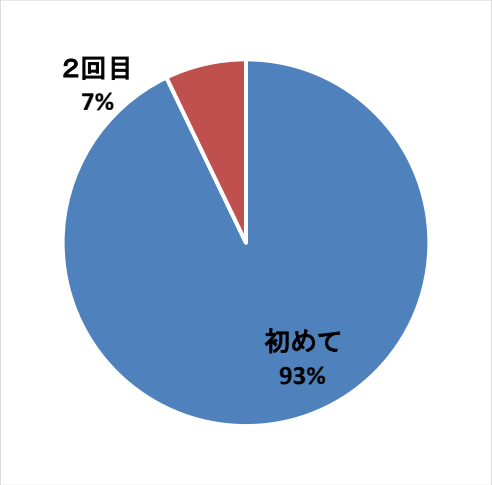
A-05 Jamna Prasad Ahirwar
時間の管理、人々の忠実さ、そして礼儀正しい日本の人々の性質について理解しました。

A-07 Tarun
教員と生徒の素晴らしい関係性と、特に女性が勤勉だったこと。

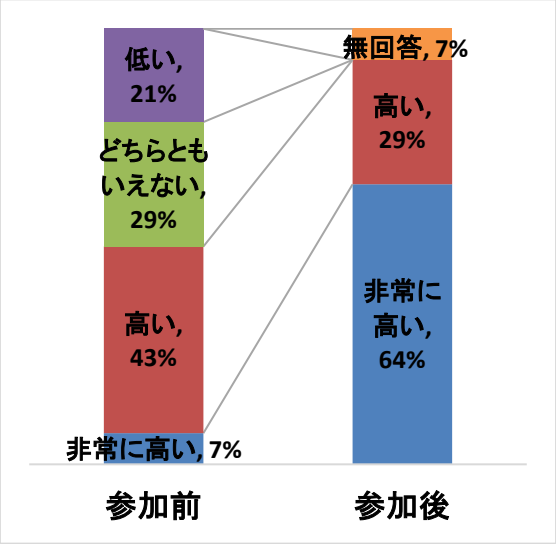
A-09 Rajendra Kumar Nayak
自律、時間への忠実度、教員と校長の説明責任能力。教員は意欲的で教室内での学ぶ環境を創り出していたこと。

A-11 Urvashi Soni
日本の教育は学位を取得するだけでなく学生の日常生活にも寄与するということ。

◆質問 5．日本に来日するのは何回目か



◆質問 6．プログラム参加前後での日本の教育全般への関心の変化



A-01 Santosh R Sutar（低い→非常に高い）
国際交流の真の目的を理解できたため。

A-03 Manjusha Sharma（高い→非常に高い）
当初はインターネットを通した情報でしか日本を知りませんでしたが、実際に訪ねて経験することによってさらに興味を覚えました。

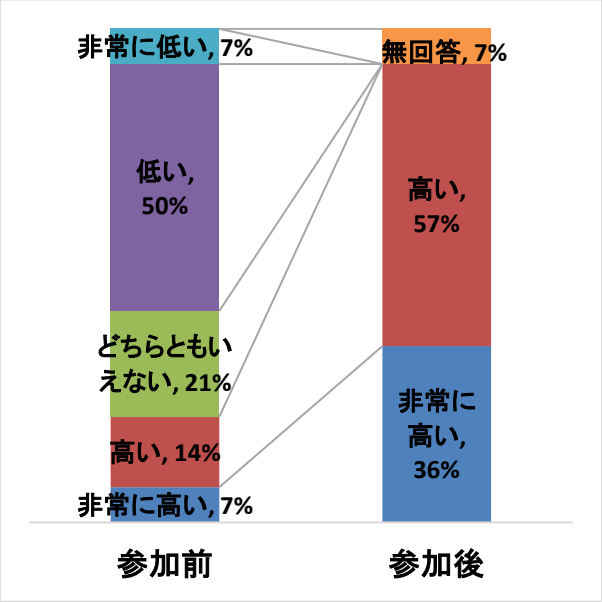
A-07 Tarun（高い→高い）
教員が変わるような学習の場、それによる生徒の変化、そして未来の変化を目撃しました。

A-10 Anshul Kharbanda（どちらともいえない→非常に高い）
日本人は気質的にとても規律正しく丁寧で運営スキルが良く、また日本の教育システムがとても良いもののため、日本は広島・長崎の原爆投下から立ち上がることが出来たのだと理解しました。

A-11 Urvashi Soni（どちらともいえない→高い）
全国民に対する教育の平等性、部活動の重視、理論より実践的な教育等に関心を持った。

A-14 Basavaraju Giriyapura（どちらともいえない→非常に高い）
教育政策の実践法や職業訓練教育における成功について関心を持った。

◆質問 7．プログラム参加前後での日本の教育全般への理解度の変化



A-01 Santosh R Sutar（低い→非常に高い）
教育制度に対するシステマティックな説明と、教員・生徒との交流によって日本の教育制度についてより良い理解を得ることができた。

A-03 Manjusha Sharma
（どちらともいえない→高い）
以前は日本の教育は優れているがストレスも多いと思っておりましたが、それは本当のイメージではないと思うようになりました。

A-04 Ishwant Kaur（どちらともいえない→高い）
訪問以前に日本の教育についてインターネットで理解していましたがそれは今回の精巧なプログラムによってさらに深められました。

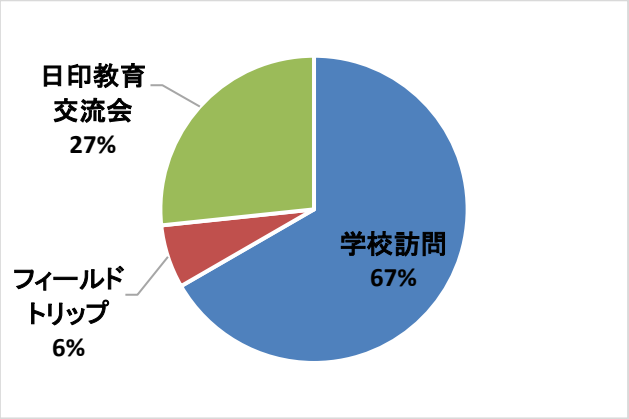
A-06 Anil Kumar Singh（低い→非常に高い）
以前も日本の教育についてよい印象を抱いておりましたが、プログラム参加後は必要な施設ややる気に満ちた教員たちを知り、様々な活動が有意義な学びを導いていることを知りました。

A-09 Rajendra Kumar Nayak（高い→非常に高い）
プログラム参加によって学校施設ややる気にあふれた教員を視察し、意義のある学習環境をもたらす様々な活動を見出すことができました。

A-11 Urvashi Soni（低い→高い）
日本の教育システムはインドと同じだと思っていましたが、学生の将来的なことに備えて職業教育にも重きを置いている点は違うということが分かりました。

A-15 Vicram Yadav（低い→高い）
訪問や交流を通して日本の教育について理解を深めたが、もっとフィールド学習の必要性を感じた。

◆質問 8. 日本の教育の理解に役立った項目を一つ選んでください



A-03 Manjusha Sharma（学校訪問）
学校訪問によって、日本の学校が機能している姿を見ることができ、また社会科の授業では問題解決型メソッドを学ぶこともできました。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar（学校訪問）
生徒たちと触れ合うことが出来たので、良く理解できました。

A-06 Anil Kumar Singh（学校訪問）
様々な学校を訪問することによって、教育実践・活動・施設・教員の介入を見学することができ、日本の教育について理解を深めることが出来ました。

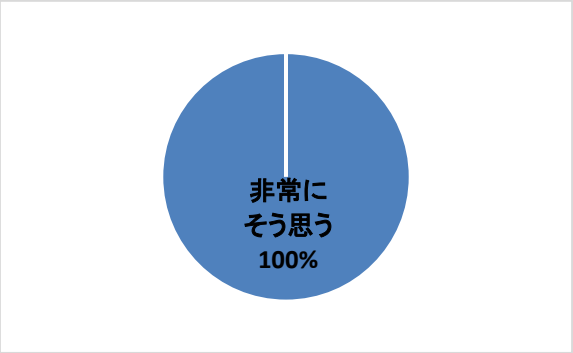
A-11 Urvashi Soni（学校訪問）
学校訪問は日本の教育システムの内面をもっと良く知る良い機会となりました。

A-01 Santosh R Sutar（日印教育交流会）
教員との交流を通して日本の教育について考察し理解することができた。

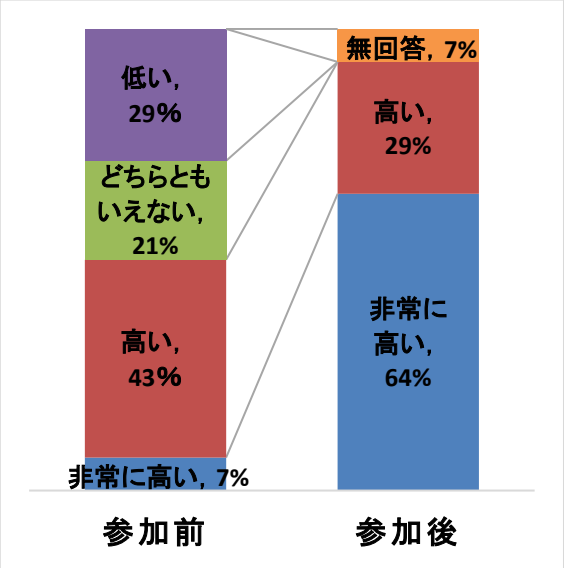
A-15 Vicram Yadav（日印教育交流会）
日印教員交流会は日本の教員と実際に交流できる驚くべき機会でした。

A-14　Basavaraju Giriyapura Somashekharappa（フィールドトリップ）
生物多様性や歴史等、ガイドさんによるガイドは初めての経験でした。

◆質問 9. 日本の教育について今後更に学びたいか



◆質問 10．日本への理解度の変化



A-01 Santosh R Sutar（高い→非常に高い）
富士山を散策し、東京でもすごせたので、日本の地方と都会を両方知ることができた。

A-03 Manjusha Sharma（高い→非常に高い）
以前も日本の教育には良いイメージを抱いていましたが、今は日本の教育こそ生徒たちに勉学の探求心を抱かせる最良の形であると感じるようになりました。

A-04 Ishwant Kaur（どちらともいえない→非常に高い）
緻密なプラン構成のプログラムによって、それまで知らなかった日本の教育と文化の側面について理解することができ、さらに理解は深まりました。

A-06 Anil Kumar Singh（低い→常に高い）
本物の観察、例えば実際に目の前で授業を見学できたことが理解度の変化に繋がりました。

A-08　Ashminder Singh Bahal（低い→常に高い）
日本の人々・機関・文化に直接ふれ合う経験を持てたので、理解度が変わりました。

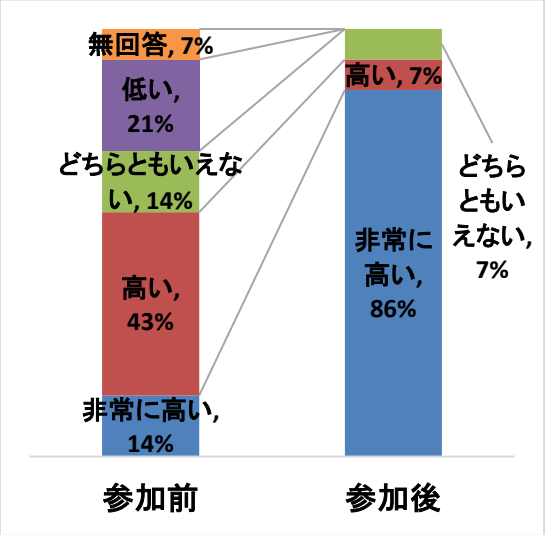
A-11 Urvashi Soni（低い→高い）
日本訪問によって日々の生活における日本人の規律正しさや清潔さを知ることができ、それは私が抱いていた日本への理解を覆すものでした。

A-13 Santosh Bahuguna（非常に高い→非常に高い）
日本人の規律正しさを知っていましたが、様々な学校の訪問後、それはまさに正しいということを発見しました。

A-14 Basavaraju Giriyapura Somashekharappa（どちらともいえない→高い）
色々な地域や施設の訪問、そして人々との触れ合いを通して理解度が変わりました。

A-15 Vicram Yadav（どちらともいえない→非常に高い）
深い洞察を含んだ様々な経験を持った教員らと経験を共有し交流できたため変わった。

◆質問 11．日本及び日本人の全体的な印象の変化



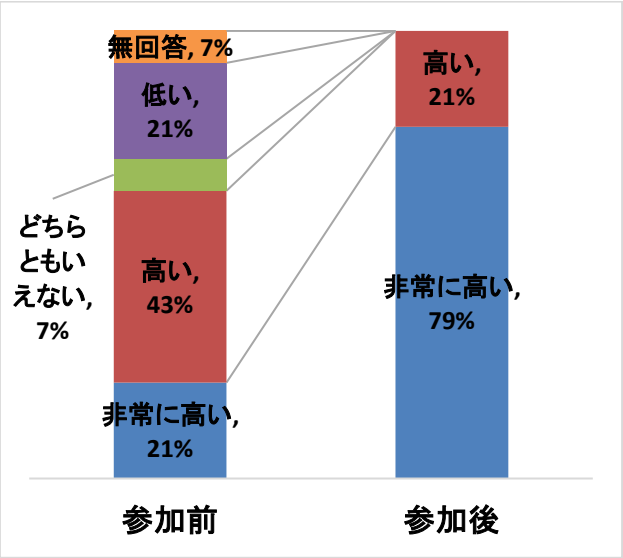
A-15 Vicram Yadav（良い→非常に良い）
以前は日本に対して限られた理解しかなかったが、日本の教員との交流を通して日本人に対してはっきりとした印象を持つようになりました。

A-10 Anshul Kharbanda
（どちらともいえない→非常に良い）
日本人は時間に正確で優しく丁寧な対応をし、日本は技術的先進国・開発先進国である。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar（どちらともいえない→良い）
日本の人々は時間に忠実で勤勉であることを知りました。

A-09 Rajendra Kumar Nayak（良い→非常に良い）
教員たちは非常に意欲的で真心があった。そして、学習への自由な裁量が与えられていた。

◆質問 12．国際理解教育や ESD への関心の変化



A-08　Ashminder Singh Bahal
ESD の真の意味を理解しました。

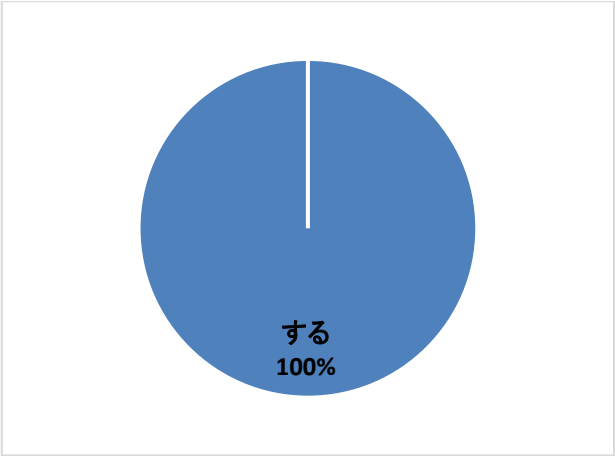
A-11 Urvashi Soni
（どちらともいえない→高い）
現在、世界は環境・貧困・人権・平和・開発という多くの問題を抱えていますが、プログラムを通して、これらの問題に対してどのように草の根レベルで貢献していくかについて関心が高まりました。

A-04 Ishwant Kaur（高い→非常に高い）
以前は持続可能な社会について懸念していましたが、日本の環境に配慮した ESD の実践を観察して、国際理解によってさらにインドで ESD の実践が推進されると思うようになりました。

A-06 Anil Kumar Singh　（低い→非常に高い）
ESD についてとても意欲が湧くようになりました。

A-03 Manjusha Sharma（高い→非常に高い）
自身が理科の教師であるため以前より ESD には興味を抱いておりましたが、今回のプログラムを通して自身の教え方をさらに改善できました。

◆質問 13．帰国後、今回参加したプログラムの体験を生徒や同僚に報告するか



A-01 Santosh R Sutar
所属機関の政策文書や報告会で報告します。

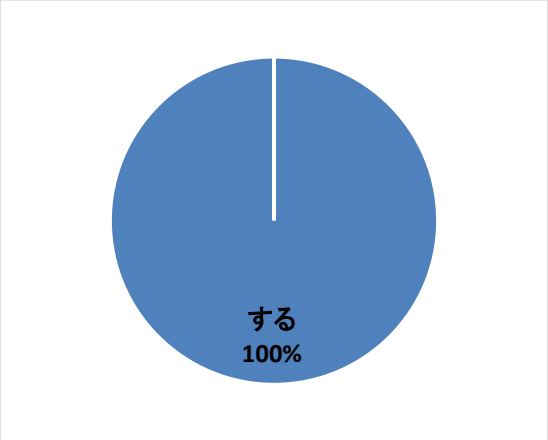
A-03 Manjusha Sharma
朝礼や職員会議で生徒や同僚に今回の経験や学びを伝えたいと思います。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar
自身の経験を教員や生徒たちに共有し、彼らを持続可能な社会に向けて啓蒙したいです。

A-07 Tarun
教員が変わることで生徒も代わるような環境づくりを通して。

A-13 Santosh Bahuguna
授業・学校誌の記事・ソーシャルメディア等を通してこの経験を共有したいです。

◆質問 14．今回の体験を自身の教育活動に活用するか



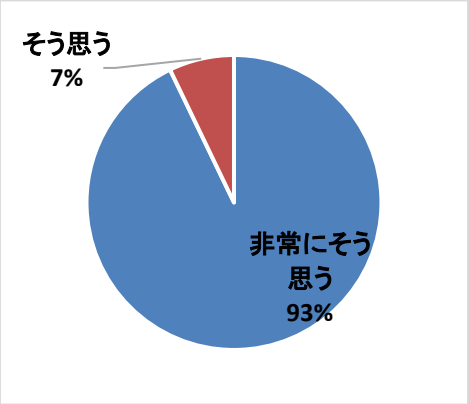
A-03 Manjusha Sharma
生徒が自身を自由に表現できるようなストレスフリーな環境を創出したいです。また生徒たちが持続可能な社会に向けた実践を人生において応用できるよう後押ししたいです。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar
自分の学校の教育活動において ESD を織り交ぜたいです。

A-10 Anshul Kharbanda
まずは自分自身の行動変革を起こし（特にリサイクルなど）、そして自分の授業に ESD の考えを統合させたいと思います。

A-09 Rajendra Kumar Nayak
カリキュラム策定、教科書政策、教育学習法において今回の経験を活かしたいと思います。

◆質問 15．プログラムで知り合った日本の教職員との交流を継続したいと思うか



A-01 Santosh R Sutar
インドで行われている教育実践について日本の教員と共に協働したい。

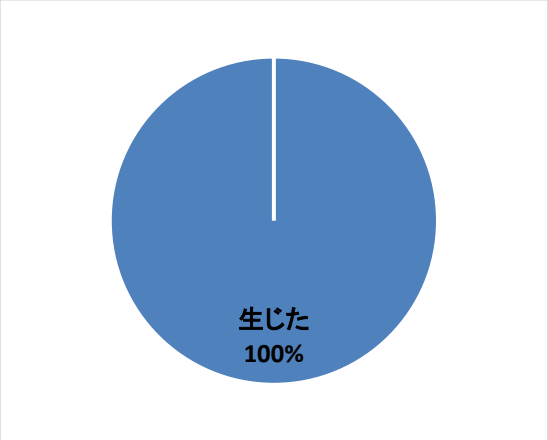
A-03 Manjusha Sharma
理科の教育メソッド、ICT の実践、統合学習について日本の教員と交流を継続したい。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar
環境教育や汚染抑制活動などの教授法における刷新的な実践について交流したい。

A-08　Ashminder Singh Bahal
意見交換、研究の深化、お互いの国の訪問プログラムに向けた協力について交流したい。

A-09 Rajendra Kumar Nayak
遠隔教育／通信教育のアプローチについて意見交換したい。

◆質問 16．プログラムを通して自分自身に変化が生じたか。またそれはどのような変化か



A-01 Santosh R Sutar
このプログラムによって ESD の視点で国際交流を捉えることができました。

A-03 Manjusha Sharma
環境科学および持続可能な実践について興味を持つようになりました。自分の生徒たちが責任感のある地球市民になるように教えたいと思います。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar
現在は持続可能な社会についてより深く考えるようになりました。

A-07 Tarun
日本とインドの協力的な率先によって、持続可能性に関して世界の人々の考えを変えることが出来ると思うようになりました。

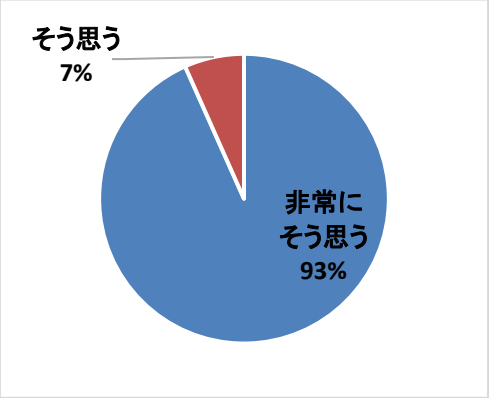
A-12 Ravi Kant Mishra
自分の生徒たちを責任感のある地球市民にしたいと思うようになりました。

A-13 Santosh Bahuguna
今回の機会での生徒や教員の方々との交流を通して、たくさんのことを学びました。

A-11 Urvashi Soni
このプログラムは、破壊された国家から開発された国家へと発展した日本という国への理解を促し、私の目を開かせていただきました。

A-15 Vicram Yadav
はい、もちろんです。この 7 日間は自分のことを深く見つめる機会となり、日本人の正確さや責任感について吸収することが出来ました。

◆質問 17．インド教職員招へいプログラムの継続は必要だと思うか。なぜか。



A-03 Manjusha Sharma
はい、とても必要です。なぜなら、このようなプログラムによって相互理解や教育を通した協働が可能になるからです。

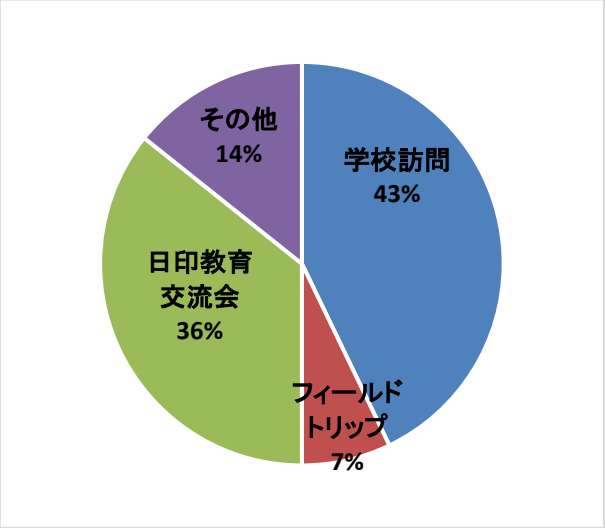
A-12 Ravi Kant Mishra
はい。このようなプログラムは国際理解を推進するものなので。

A-07 Tarun
はい。教育たちが変わることで生徒たちが変わり、生徒たちが変わることで未来が変わるからです。

A-15 Vicram Yadav
インドと日本は地理的には遠いけれど、友情においてとても近いのだと思います。このようなプログラムはお互いの結束力、理解を深めることにおいて重要な役割を果たしています。

A-06 Anil Kumar Singh
このプログラムが存続することを強く望みます。というのも、このプログラムによって教育や持続可能な開発について意見交換をする場が与えられるからです。

◆質問 18. プログラム中で最も有意義だと感じた活動



A-03 Manjusha Sharma（学校訪問）
学校訪問は間近で教育実践を理解し、改善し、学ぶ機会を与えてくれるからです。

A-09 Rajendra Kumar Nayak
（学校訪問）
学校見学によって本当に理解が深まりましたし、生徒と教員とも交流することができました。

A-13 Santosh Bahuguna（学校訪問）
学校訪問を通して、教育システムの長所や短所を学ぶことができたからです。

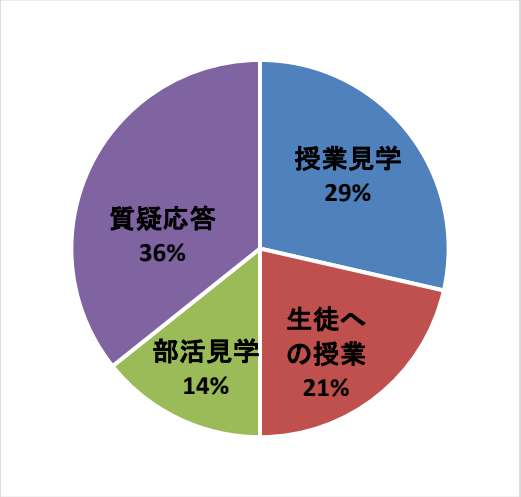
A-07 Tarun（日印教育交流会）
日印教育交流会では教育分野での様々な専門家のテクニックや意見の交換ができた。

A-11 Urvashi Soni（日印教育交流会）
日印教育交流会は実に意義深い活動でした。なぜなら教員の方々は、教育制度の中で草の根レベルで実践しているメインの方であり、実践者として最も分かり合えるからです。

A-15 Vicram Yadav（日印教育交流会）
日本の教員との 1 対 1 の交流は経験を共有出来るからです。

A-14　Basavaraju Giriyapura Somashekharappa（フィールドトリップ）
持続可能な自然や生物多様性についての初めてフィールドトリップを経験した。

◆質問 19．学校訪問に関して最も有意義と感じた活動



A-09 Rajendra Kumar Nayak（授業見学）
授業見学によって生徒と教員の関係性と教育学習スプロセスについて理解できました。

A-06 Anil Kumar Singh（授業見学）
授業見学によって教員と生徒の関係を見学でき、教育学習方法についても理解することが出来ました。

A-10 Anshul Kharbanda（質疑応答）
日本の学校教育システムについて詳しく知ることが出来ました。また、私たちの胸中にあるどんな質問も対応していただけました。

A-14　Basavaraju Giriyapura Somashekharappa（質疑応答）
質疑応答ではインドの生徒への興味が伺えました。また、私たちは質疑応答を通して問題意識を持つことができました。

A-03 Manjusha Sharma（生徒への授業）
生徒に対する授業によって生徒たちと直接かかわりあうことができました。また生徒たちのインドに対する興味にも気づくことができ、それに答えてあげることもできました。

A-12 Ravi Kant Mishra（生徒への授業）
授業を行うことによって生徒たちと直接触れ合うことが出来、生徒たちの興味についても理解できました。

A-05 Jamna Prasad Ahirwar（部活見学）
学校の活動で生徒たちが課題に真摯に向き合う姿を見学できて感銘を受けました。

◆質問 20．他にどのような活動がプログラムにあったらよいと思うか

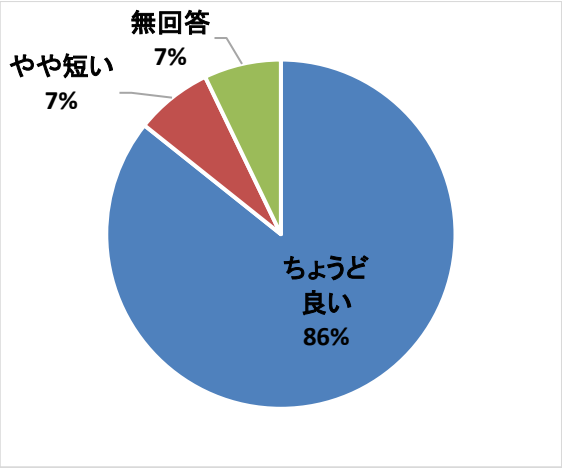
A-06 Anil Kumar Singh
教員養成機関への訪問。

A-15 Vicram Yadav
日本の教員の方々はプログラム中は同じホテルに滞在し、行動をともにすれば信頼関係が構築できたのではないかと思います。そして友情を長きにわたり継続できるでしょう。

A-11 Urvashi Soni
プログラム中に両国の教員が一緒に寝泊まりして行動すればもっと教育について議論が出来た。また、実際に訪問する前にもっと詳しいクラスの情報を知れると良いです。

A-14　Basavaraju Giriyapura Somashekharappa
地方やへき地の学校訪問。

◆質問 21．全体の日程の長さについて



A-05 Jamna Prasad Ahirwar（ちょうど良い）
8 日であらゆることがが押さえられていました。すばらしい。

A-13 Santosh Bahuguna（ちょうど良い）
日本人のライフスタイルや教育システムを理解するには十分でした。

A-10 Anshul Kharbanda（ちょうど良い）
もう 1 日フィールドトリップが出来ればと思いました。日本はとても素晴らしい国です。感動しました。

A-15 Vicram Yadav（ちょうど良い）
15 日間に増やすと双方の教員がもっと深く学びあえると思います。

◆質問 22. 改善すべき点について

A-03 Manjusha Sharma
学校の試験や入試についての情報がもっと欲しかったです。

A-14　Basavaraju Giriyapura Somashekharappa
交流会に参加した日本人教員と 1 日でよいので近場にフィールドトリップに行くプログラムを入れる。

◆質問 23. その他気づいたこと

A-05 Jamna Prasad Ahirwar
全プログラムが素晴らしかったです。日本の人々は礼儀正しく時間にも忠実で素直で日本が好きになりました。

A-07 Tarun
人生における新たな変化として、そして意見交換のためにもこのようなプログラムは継続させるべきです。

A-14　Basavaraju Giriyapura Somashekharappa
このプログラムは良く計画的に運営されていた。学校訪問、様々な施設への訪問、教員の方々との交流はとても役に立ちました。

A-15 Vicram Yadav
教員の方々にこのような機会のさらなる拡充をお願いします。なぜならば、それは教員の変革、生徒の変革、親の変革、社会の変革に繋がると思うからです。

２．受入校コメント

筑波大学附属駒場中・高等学校　教諭　八宮孝夫

①　プログラムの全体的な感想・印象

皆さん、穏やかで、授業風景を熱心に観察し、写真を撮っていたことが印象に残りました。質疑応答も活発に行われました。

②　子どもたちが得たもの

授業の参観であり直接の交流は少なかったので、残念ながらその効果は具体的には何とも言えないが、理科の実験などで質問された生徒が英語で一生懸命説明しているのをインド人の方々は真剣に聞き入っていたので、その個人の生徒にとっては貴重な体験になったと思われる。

③　教員・学校が得たもの

特に理科系の授業に熱心に聞いていたので、さすがに理数系に強いお国柄だと、改めて感心した。

④　苦労した点

訪問日は、たまたま、理数系の授業の少ない日であったので、参観授業として満足していただけるか不安であった。もう少し、こちらの授業に都合に合わせていただけると、もう少し良いものが提供できるかもしれない。

⑤　加えるとよいと思われる活動

ただ授業を参観するのではなく、インドの話や授業の様子を話していただくなど、何かしらで生徒と交流する機会が持てるとよいと思う。

⑥　プログラムの改善に向けた助言

特にありませんが、訪問期日がもう少し選択のゆるみがあると受け入れやすいです。

目黒区立五本木小学校　指導教諭　鈴木陽子

① プログラムの全体的な感想・印象

インドの先生方を本校にお迎えしたのは初めてでした。他国（日本）の教育への関心が大変強いことが熱心な参観の姿から伝わってきました。全学年の授業を少しずつ見学していただきました。特に算数の授業では児童の思考に対してノート筆記に注目され、OK！や気付きを促す支援をされていたことが印象に残っています。主に 3 年生児童（総合的な学習の時間）との交流が中心でした。インドの文化や生活についてパワーポイントでお話しいただき、子どもたちは見知らぬ国の方々と交流に心を躍らせていました。

② 子どもたちが得たもの

異文化理解、自国の文化理解。交流そのものが、児童や教職員にとって貴重な経験となりました。服装は伝統的な美しい色の衣装を身に付けてこられ、身近で目にすることは初めてでした。インドといえばカレー、しかしその奥深さや地域により異なる素材、味があることは驚きでした。様々なベジタリアンについても理解を深めました。

③ 教員・学校が得たもの

異文化理解、服装・食生活・気候の違い、インドの先生方の日本の教育への関心（特別支援教育、算数）、特別支援教育に対する関心が大変強いこと、熱心であることが伝わってきました。「ゆりのき学級」の施設を見学されました。担当教師への質問の鋭さに、私たち自身があらためて特別支援について考える機会をいただきました。

④ 苦労した点

校長が不在であったこと、日程が長期休み明けすぐであったこと、十分なお迎えにならなかったのではないかと恐縮しています。事前に綿密な説明や打ち合わせを設けていただいたことに感謝しています。

⑤ プログラムの改善に向けた助言

難しいかとは思いますが、交流日程の選択肢があるといいかなと思いました。

神奈川総合産業高等学校　講師　望月浩明

① プログラムの全体的な感想・印象

インドの先生方が国際理解の授業でテーマごとに工夫に富んだプレゼンテーションを行ってくれ、授業のなかで生徒や先生方と積極的にコミュニケーションをとって頂けた。インドで全国的に大規模なかたちで遠隔地教育が実施されていることに驚いた。日本国内でも学校に行けない生徒が多く存在する状況のなか、そうした教育手段は参考になるところがある。

② 子どもたちが得たもの

普段、なかなか交流する機会が無いインドの方と直接交流ができたことは生徒にとって良い経験になった。生徒達もインドの言葉や挨拶などをスマホなどで調べたりして興味・関心を持ってインドの先生たちと接することができた。インドの先生方に日本の社会や文化を紹介した生徒がいたが、どうすれば日本の特色を分かりやすく説明ができるかについて、生徒自身もいろいろと工夫し、発見をしながらプレゼン画像を作りあげた。その過程の中で生徒自身にも大きな学びがあった。

③ 教員・学校が得たもの

本校で海外からの教員団を受け入れるケースは初めてだったので、戸惑いもあったが、先生方や生徒達が積極的に協力してくれて受け入れる側にとっても異文化体験としてたいへん良い経験になった。

③ 苦労した点

どうしても、いろいろと見てほしいと思ってしまうため、時間が押してしまい、タイトなスケジュールになってしまい、インドの先生方もちょっと疲れてしまったようだ。プログラムとプログラムの間にもう少し、休憩時間を長くとるようにしたかった。

⑤ 加えるとよいと思われる活動

学校のスケジュールの関係で難しいところがあるが、やはり、教員同士が学校運営、授業、生活指導、進路などについてそれぞれの国でどんな工夫をしながら取り組んでいるかを話し合うことができるとお互いに良い経験になると思う。

⑥ プログラムの改善に向けた助言

インドの先生方が教員や生徒に対する質問項目を出してくれていたが、当日の見学時間のなかでは答える時間が十分にとれない。もう少し早く学校に送っておけば、学校側で予めその答えをプリントアウトするなどして準備しておくことができると思う。

神奈川総合産業高校　臨時的任用職員　磯崎慶子

① プログラムの全体的な感想・印象

日々の業務に手一杯で、なかなか見識を広げられないので、とてもありがたい機会だった。インドの先生がヨガ・ダンス・インド式数学・多様な言語などのインド文化を紹介する授業をしてくれたが、分かりやすくてとても面白かった。インドのことは良く知らなくて、知ろうともしていなかったが、ひとつの国の中に様々な文化が入り混じっていており独特な文化があって面白いと思った。また、数学の授業見学中にインドの方から「これは生活にどう結びつくのか」と問われハッとし、勉強だからと割りきりがちな所を反省した。インドは理系教育が進んでいるイメージだったが、逆に日本の理系教育に興味を持っていることが印象的だった。

② 教員・学校が得たもの

インドでは理系科目は全て英語で教えているということ、実験を多く取り入れて授業をしているということ、言語は違っていても教えている内容はおおむね同じであるということ、インドにも私立高校があり入学試験による選抜があること等を知った。また、訪問時にインドの先生が本当に細かい所まで吸収しようと生徒達へ積極的に質問している姿に見習おうと感じた。

③ 苦労した点

昼食時の交流はいきなり雑談という形だったので、何を話してよいかとまどった。質問集などを用意しておくとより意見交換が活発になったと思う。

④ 加えるとよいと思われる活動

教員同士のみで交流する時間、学校外での食事の席、テーマを決めたグループディスカッション、料理教室等があると、教員間の親睦がより深まると思う。また、インドの教科書を見てみたかった。

④ プログラムの改善に向けた助言

この度は教員も含め、貴重な体験をさせていただきありがとうございました。今回のアンケートで生徒の感想に多く見受けられたのが、時間が足りない・もっとインドのことについて知りたかったという声であり、今回の体験は生徒の知的好奇心に繋がるとても有意義なものであったことと思います。今回の反省点としては、テーマ設定などがどうしても“大人目線”だったように感じたので、今の子ども達が実際に興味を持っている“生徒目線”のテーマなどをより一層充実させてあげられたた良かったかな、と思っています。もし、ユネスコ事業に関わらず、またこのような機会があれば、その時にはぜひ今回の反省点を活かして参りたいと思います。本当にありがとうございました。

神奈川総合産業高校　インド教職員の授業を受けた生徒

①　プログラムの全体的な感想・印象

・インドに全く興味が無かったが、今回の機会をきっかけにインドに興味を持った。
・インド文化の授業は 100 分でも時間が少ないと感じた。もっと時間が欲しかった。
・４つもテーマがあったのに、時間の都合で半分しか聞けなかったのが勿体無かった。
・インドは混乱している社会というイメージがあったが、実際に話を聞くと調和しているように感じた。
・インドの文化に直接触れていると感じることが出来た。
・実際にインドの人と話すことができて、インドについて知ることができ、楽しかった。
・インドの魅力はカレーだけだと思っていたが、他にも沢山魅力があった。
・最初は人数が多く緊張したが、とても楽しかった。
・日本とインドは言語など色んな違いがあるが、日本と似ている文化もあって驚いた。
・インドについてもっと事前に調べておけばよかったと感じた。
・ダンスとヨガのことしか聞けなかったので、他のことも聞きたかった。

②　子どもたちが得たもの

・国際交流部の生徒達にとって大変に貴重な異文化交流の機会となった。
・民族色というのが強いかと思っていたが、明るく気さくで面白い人たちだということが分かった。
・ 他国について話を聞いて知ることと、逆に他国の人と話すこと自体の難しさを学んだ。
・インドの人はみな同じ言語だと思っていたが、地域によって違う言語だということや地域ごとで文化が違い、多文化社会であるということに驚いた。
・ヨガは健康のためだけにやるものだと思っていたが、精神的な意味も持っている事を学んだ。
・数学を教えてもらい、もともと数学が好きなのでとても印象に残った。日本とインドの数学の違いを知ることができた。

③　加えるとよいと思われる活動

・インドの習慣、文化の違い、伝統的な文化等をもっと知りたかった。
・一緒にゲームや文化的な遊びをしたら面白いと思う。
・４対１くらいの小規模での話し合い。
・話すだけではなく、食事などでも交流したい。
・一方的に文化を教わっただけだったので、こちらからももっと日本の文化などを伝えられたら良かった。

3．事業担当者コメント

ACCUは、「心の中に平和の砦を」というユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋地域の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、2001年より教職員の国際交流事業を行っており、これまでに日本と韓国・中国・タイおよびインドとの間で５千人近くの教職員の交流が行われ、それにより多くの学校間交流や姉妹校締結が生まれました。未来を担う子供達に大きな影響力を持つ教職員の方々が、国際交流を通して相互理解と友好を深め、さらにその学びを子供達に還元して国際理解教育の担い手となり、学校レベルでの持続的な国際交流を育むことで、国レベルでの相互理解と友好が促進され、ひいてはアジア太平洋地域の安定、そして世界の平和と持続可能性の実現に繋がると信じております。

今回のインド教職員招へいプログラムではインドの社会的なニーズを踏まえ、専門高校、児童館、環境教育で有名なユネスコスクールの訪問や、エコツーリズムの体験学習も実施しました。学校訪問では授業を見学するだけでなく、生徒と給食を食べながら交流したり、インドの文化やインドの環境教育を日本の生徒に紹介する授業も行い、直の交流が多くできたことが訪問団だけでなく受け入れ校からも喜ばれました。

また、日印教職員間の学び合いや交流をより深めるために、日本全国から公募で集まった日本人教職員とインド教職員が一日をかけて交流した日印教育交流会を実施し、インド教職員によるインドの教育に関する講義、「持続可能な社会に向けた教育」の日印両国の事例紹介、グループディスカッション、今後の教育活動作り等を行いました。参加した日印の教職員の方々からは、「平和・環境・貧困・開発・人権といった世界の課題に対して、草の根レベルでどう対応していくかを考えるヒントとなった」「インドの先生方とともに2050 年の大人を育てる」「国際理解のために日印の協働を図っていく」といった声が聞かれました。このように、教職員の方々が国際交流を通してお互いに学び合い、相互理解と友好を深め、持続的なネットワークを構築するきっかけとなる交流の場を作っていけるよう今後も尽力してまいります。

最後になりましたが、同プログラム実施にあたりましては、実に多くの皆様の多大な御支援と御協力を頂きました。受入校の皆様、日印教育交流会にご参加頂いた日本の先生方、在日インド大使館、その他の教育機関の方々には暖かくインドの先生方をお迎え頂きましたことにここに改めて厚く御礼申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部　藤澤　弥生

付録

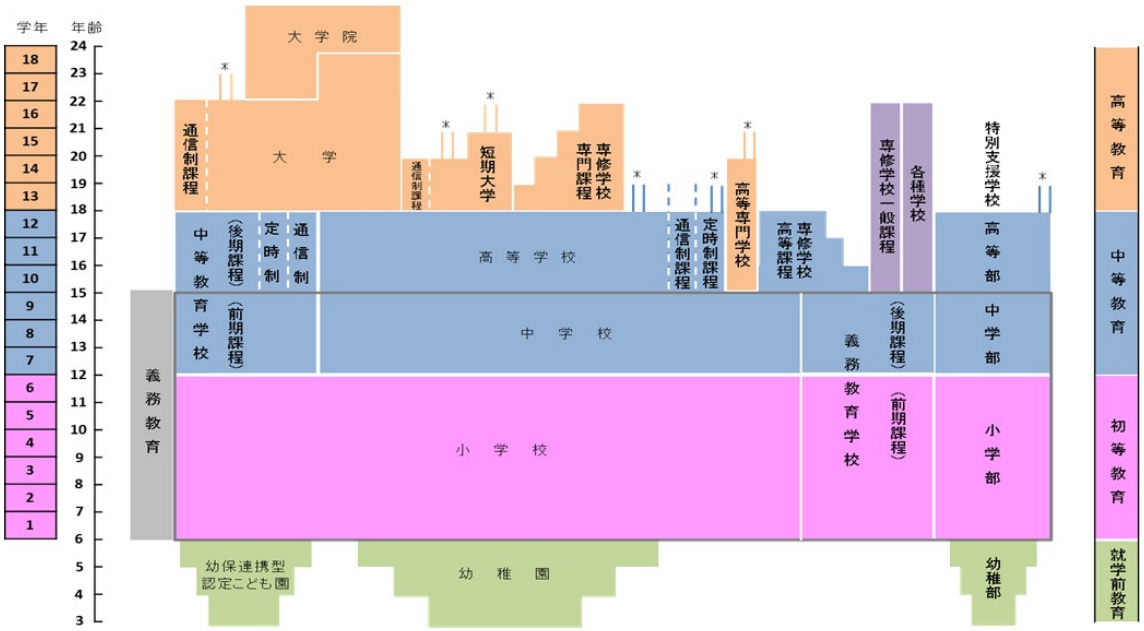
付録１ 文部科学省講義資料

日本の初等中等教育の概要

文部科学省　初等中等教育局　国際企画調整室
平成30年10月9日

文部科学省

学校体系



（注）（1）＊印は専攻科を示す。
（2）高等学校、中等教育学校後期課程、大学、短期大学、特別支援学校高等部には修業年限1年以上の別科を置くことができる。
（3）幼保連携型認定こども園は、学校かつ児童福祉施設でありO～2歳児も入園することができる。
（4）専修学校の一般課程と各種学校については年齢や入学資格を一律に定めていない。

2

義務教育制度の概要

憲　法

第26条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

第5条　国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

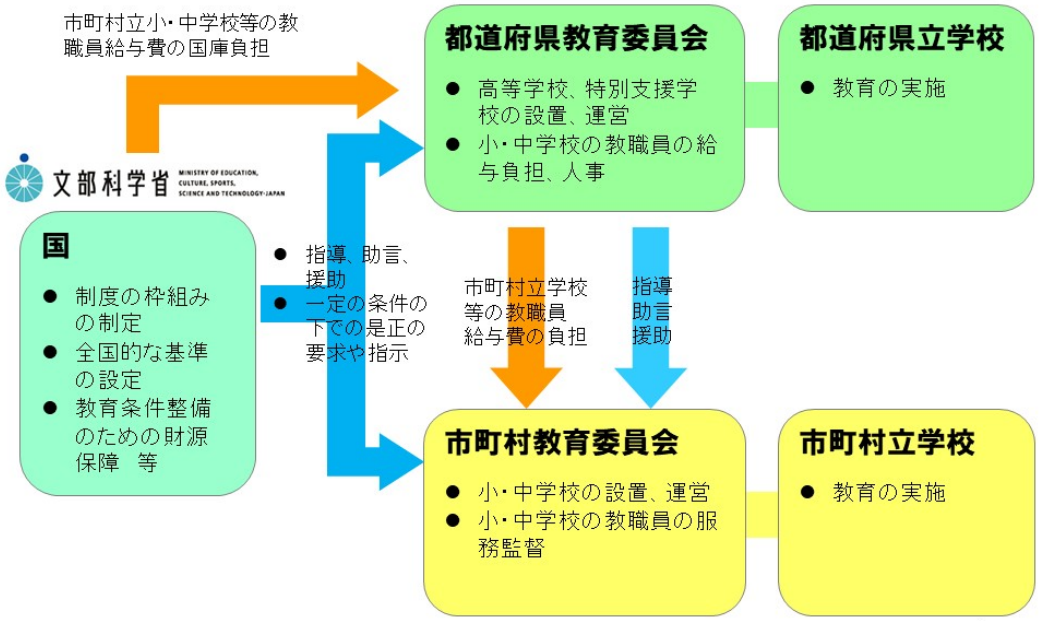
2　義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

3　国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。

4　国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

3

教育行政における国・都道府県・市町村の役割分担



4

教育委員会制度の仕組みと趣旨

教育委員会制度の仕組み

○ 教育委員会は、首長から独立した行政委員会として全ての都道府県及び市町村等に設置。

○ 教育委員会は、教育行政における重要事項や基本方針を決定。

○ 教育委員会は、常勤の教育長1人と非常勤の教育委員4人の原則5人で構成。任期は教育長は3年、教育委員は4年でそれぞれ再任可。

○ 教育長は、教育委員会の会務を総理し、教育委員会を代表する（会議の主宰者、具体的な事務執行の責任者、事務局の指揮監督者）。地方公共団体の長が、議会の同意を得て任命。

制度の趣旨

A 政治的中立性の確保

● 教育は、その内容が中立公正であることが極めて重要。個人的な価値判断や特定の党派的影響力から中立性を確保することが必要。

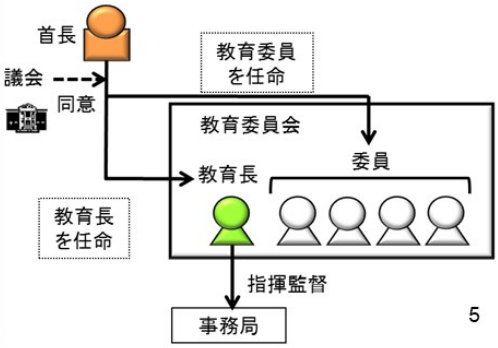
B 継続性・安定性の確保

● 特に義務教育について、学習期間を通じて一貫した方針の下、安定的に行われることが必要。

C 地域住民の意向の反映

● 教育は、地域住民にとって関心の高い行政分野であり、専門家のみが担うのではなく、広く地域住民の参加を踏まえて行われることが必要。

（イメージ図）



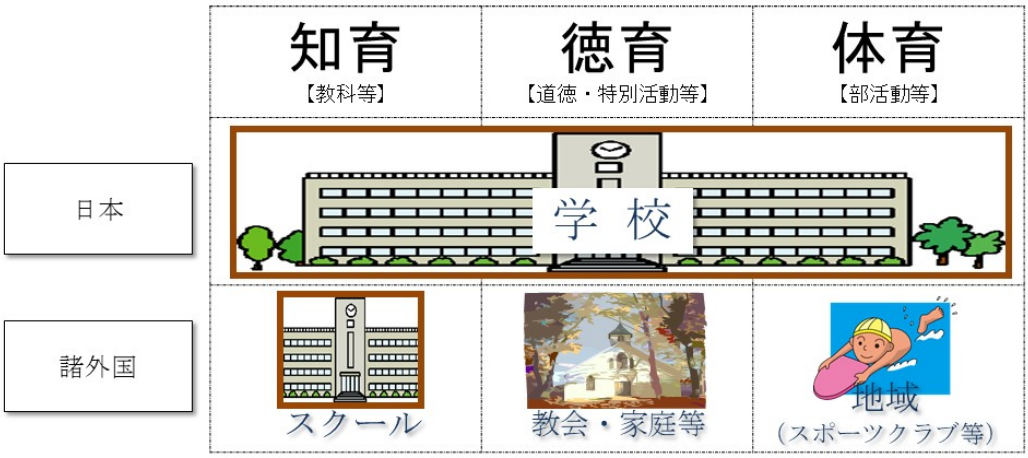
5

「学校」の在り方の国際比較

日本の「学校」と、諸外国の「スクール」の在り方は大きく異なる。

→諸外国の教員の業務が主に授業に特化しているのとは異なり、
　日本の教員は、教科指導、生徒指導、部活動指導等を一体的に行うことが本務。

→日本の学校は地域社会の中核であり、地域コミュニティの活性化に重要。



※体育…部活動は、日本は学校を中心に行うが、米・英は学校と地域で、独・伊・北欧は地域を中心に行う。

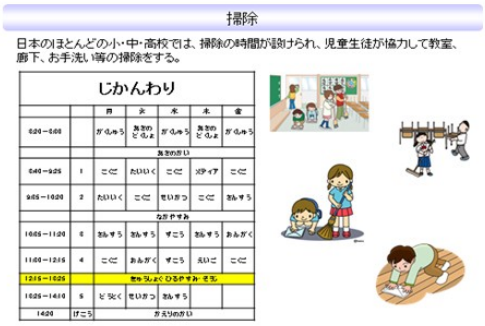
9

日本の学校教育の特徴

全人的な学び

諸外国では、教員の業務が主に授業に特化しているのに対し、**日本では、教員が、教科指導、生活指導、部活指導等を一体的に行い、生きる力（確かな学力、豊かな人間性、健やかな体）をバランスよく育む全人的な教育を行っている**。

これは、日本の学校が、それぞれの時代において社会の要請に応えながら、子供たちに必要とされる資質・能力を育むことができるよう発展してきた姿であり、こうした「日本型学校教育」は、国際的にも高く評価され、学力面ではＰＩＳＡ等の国際調査で世界トップレベルになっている。



7

学習指導要領

学習指導要領とは

全国的に一定の教育水準を確保するとともに、実質的な教育の機会均等を保障するため、国が学校教育法に基づき定めている大綱的基準。学習指導要領では、小学校、中学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や最低限教えるべき教育内容を定めている。これまで、おおむね１０年ごとに改訂してきている。

学習指導要領に関する法制上の仕組み

国	学習指導要領など、学校が編成する教育課程の大綱的な基準を制定 （各教科等の構成、年間の標準時間数、教科等の大綱的な目標、内容等）
教育委員会 （設置者）	教育課程など学校の管理運営の基本的事項について規則を制定 （学年・学期、休業日、校務分掌、教育課程編成や教材使用の手続き等）
学校 （校長）	学校や地域、児童生徒の実体等を踏まえ、 創意工夫した教育課程を編成・実施

8

「学力の三要素」と「生きる力」について

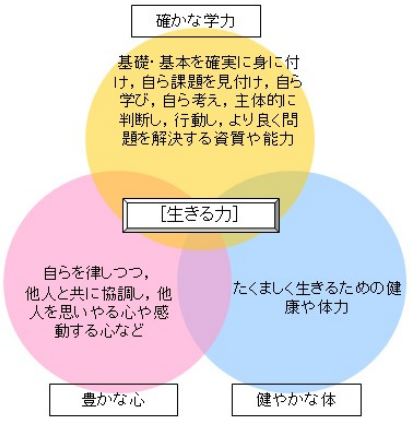
〈現行学習指導要領の理念〉

- 平成10～11年改訂の学習指導要領の理念は「生きる力」を育むこと
- 「知識基盤社会」の時代において「生きる力」を育むという理念はますます重要
- 教育基本法改正等により教育の理念が明確になるとともに，学校教育法改正により学力の重要な要素が規定

○　学校教育法（昭和２２年法律第２６号）

第30条（略）

② 前項の場合においては，生涯にわたり学習する基盤が培われるよう，基礎的な知識及び技能を習得させるとともに，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくみ，主体的に学習に取り組む態度を養うことに，特に意を用いなければならない。



現行学習指導要領においては，これまでの理念を継承し，教育基本法改正等を踏まえ，「生きる力」を育成

「ゆとり」か「詰め込み」かではなく，これからの社会において必要となる知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をより効果的に育成

9

学習指導要領の変遷

昭和33～35年改訂
教育課程の基準としての性格の明確化
（道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等）（系統的な学習を重視）
（実施）
小学校：昭和36年度、中学校：昭和37年度、高等学校：昭和38年度（学年進行）

昭和43～45年改訂
教育内容の一層の向上（「教育内容の現代化」）
（時代の進展に対応した教育内容の導入）（算数における集合の導入等）
（実施）
小学校：昭和46年度、中学校：昭和47年度、高等学校：昭和48年度（学年進行）

昭和52～53年改訂
ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化
（各教科等の目標・内容を中核的事項に絞る）
（実施）
小学校：昭和55年度、中学校：昭和56年度、高等学校：昭和57年度（学年進行）

平成元年改訂
社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成
（生活科の新設、道徳教育の充実）
（実施）
小学校：平成4年度、中学校：平成5年度、高等学校：平成6年度（学年進行）

平成10～11年改訂
基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成
（教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設）
（実施）
小学校：平成14年度、中学校：平成14年度、高等学校：平成15年度（学年進行）

平成15年一部改訂
学習指導要領のねらいの一層の実現（例：学習指導要領に示していない内容を指導できることを明確化、個に応じた指導の例示に小学校の習熟度別指導や小・中学校の補充・発展学習を追加）

平成20～21年改訂
「生きる力」の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成のバランス（授業時数の増、指導内容の充実、小学校外国語活動の導入）
（実施）小学校：平成23年度、中学校：平成24年度、高等学校：平成25年度（年次進行）
※小・中は平成21年度、高は平成22年度から先行実施

10

学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く**知識・技能**の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「**社会に開かれた教育課程**」の実現
各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

※高校教育については、些末な事実的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

11

主体的・対話的で深い学びの実現

（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること

【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

【例】
- 学ぶことに興味や関心を持ち、毎時間、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる
- 「キャリア・パスポート（仮称）」などを活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりする

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

【例】
- 実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広める
- あらかじめ個人で考えたことを、意見交換したり、議論したり、することで新たな考え方に気が付いたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする
- 子供同士の対話に加え、子供と教員、子供と地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る

【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

【例】
- 事象の中から自ら問いを見いだし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組む
- 精査した情報を基に自分の考えを形成したり、目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり、考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成したりしていく
- 感性を働かせて、思いや考えを基に、豊かに意味や価値を創造していく

12

ご清聴ありがとうございました。

文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
IENCE AND TECHNOLOGY-JAP

付録 2 インド教職員 報告会発表資料

Invitation Programme for Teachers from India

7th – 14th October 2018

Debriefing by Indian Delegate

13/10/2018, Tokyo

ACCU MEXT MHRD Government of India Ministry of Human Resource Development CEE Centre for Environment Education

Content

- Introduction
- Objectives
- Our Curiosity
- Day-wise learning outcomes
- Key Take Away
- Practices to be adopted
- Suggestion for Japanese school
- Recommendations to MHRD
- Conclusion

Introduction

- We, 14 Indian Delegates are part of the 3rd edition of "Invitation Program for Teachers from India'' organized by ACCU in close cooperation with MHRD, MEXT & CEE
- We represent 4 key organizations of MHRD
  a) National Council of Educational Research & Training (NCERT)
  b) National Institute of Open Schooling (NIOS)
  c) Navodaya Vidyalaya Samiti (NVS)
  d) Directorate of Education, GNCT Delhi
- Coordination of this programme from India is CEE a national institute supported by Ministry of Environment, Forests & Climate Change (MoEFCC)
- We are here from 07.10.2018 till date.

Objectives

- Provide **opportunities** to Indian Teachers to visit Schools and other Educational and Cultural Institutions of Japan to **facilitate the exchange** between them and teachers and students
- **Deepen understanding** the school education system of each country between teachers of India and Japan
- Enable the teachers from India and Japan to **disseminate their learning**
- **Foster sustainable international exchange** after the programme to contribute to friendship and mutual understanding between India & Japan.

Our Curiosity

- **Know about ACCU**, MEXT, ESD practices in Japan
- How the programme **will be organized**?
- **Explore Govt. Schools** in Japan to know their teaching learning process and infrastructure facilities available for hands on activities and co-curricular initiatives such as sports, music, art etc
- **Opportunity to interact** with concerned authorities, Japanese teachers and students.
- **Taste Japanese food**; Explore Tokyo climate and Japanese culture, dance and urban life of Japan including Shopping. How to get **Indian food**

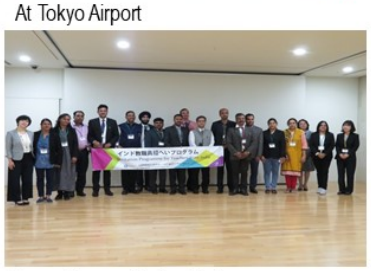
At New Delhi Airport

Day 1: Arrival in Japan and Orientation at Indian Embassy

08.10.2018

- **First foreign exposure** to most of our delegates
- Understood about **ACCU** and its activities. Appreciated their initiatives to promote international exchange program
- Got a **better clarity** about the programme and about its objectives
- **Meticulous planning** of the programmes was appreciated
- Indian Embassy and ACCU made us feel at home.

At Tokyo Airport



Group Photo at Indian Embassy

Orientation Session

Day 2: Visit to MEXT of Japan and High School at Komaba

09.10.2018

- Understood the MEXT – Functions and objectives, organization structure, efforts made in promoting **India - Japan educational collaboration**
- Had a **better understanding** and an overview of Japan's Educational Systems primarily Elementary and Secondary school, Segmentation of schooling, **National curriculum standards**
- Teacher License and **10 years license renewal** concept was a new learning
- Promotion of **integrated ESD learning** by MEXT in schools through ASPnet

Day 2: Junior and Senior High School at Komaba

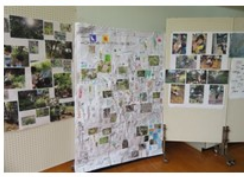
09.10.2018

- Excited about the first visit to Japanese School.
- Admired dedicated Science High School attached to a University unlike India.
- Promotion of Research Work and Field Work
- Cordial and friendly atmosphere between students and teachers
- Effective use of lab facilities and equipment's by students; medical facilities at School
- More emphasis on sports, club and co-curricular activities.
- A gymnasium court (1964 Olympics) is still used

Day 3: Meguro Municipal Gohongi Elementary School

10.10.2018

- Different exposure than the previous visit in terms of infrastructure, **ESD practice, sports facility,** a small forest inside the School.
- Unique **hand gestures** of expressing opinion.
- First **presentation** of an Indian delegate at School.
- **Curious questions** were asked by the students like how fish curry is made? Why do Indians eat by hand? What is the meaning of those patterns. What is the average temperature in India? Why red bindi is put on forehead?
- Great **experience of having lunch** with students. Facilities available to impart education to children with special needs.



Day 3: Children Centre in Gohongi Community Centre

10.10.2018

- Role of **Government** in providing facilities for upbringing of children of employed couple and those of disadvantaged group.
- Homework**, preparation for cultural programme, art and craft**, library facilities and provision of food for students.
- Experience of having snacks with the students.
- Children made creative artifacts.
- **Played sports** with students

Day 4: Kanagawa Prefectural General Industrial High School

11.10.2018

- They have the **motto 'Chance, Challenge, Creative'**.
- Only **general industrial high School in** Kanagawa Prefecture.
- High **School students select one core subject** from their field of interest.
- **Financial assistance** is provided to the School for encouraging enrollment at the School and providing state of art facilities at School.

Day 4: Kanagawa Prefectural General Industrial High School

11.10.2018

- Availability **of Night Shift Classes** for students who are employed elsewhere shows the commitment of the Govt. for mainstreaming all the children.
- Exchange between Teachers from India and **Japanese students, teachers took place through presentations, discussions and interactions about Indian Culture**, Dance, Mathematics, Languages and Ancient Practice of Yoga.

Day 4: 11.10.2018

Kanagawa Prefectural General Industrial High School

- The approach where the **teacher was first demonstrating** the process and then students were practicing the same under his/her close supervision and guidance were witnessed.
- A student while **making a presentation highlighted the work ethics of Japanese** that they practice same things till they achieve perfection as humanly as possible, impressed the delegation.
- Got to know insights of the children while having lunch with them with **open mind**

Day 4: 11.10.2018

Japan Aerospace Exploration Agency (JAXA), Sagamihara Campus

- Understood the **space exploration undertaken by Japan like Hayabusa**.
- Observed **the exhibits displayed at the campus**.

Day 5: Eco Tour Expereince, Visit to Traditional Village, Saiko Lake

12.10.2018

- Eco tour enabled to **explore** and **experience** the young **forest** of **Japan** and the geological aspects of **Mt. Fuji**
- Understood the **livelihood options** generated through **eco tours to local community** through eco guides and participatory cooking options
- Enthralled with **rich culture** that is embedded in the **traditional villages** of Japan
- **Bat caves** formed due to lava the were interesting to explore

Day 5: Visit to Kawaguchi Sengen Shrine

12.10.2018

- Observed the peace and serenity of **this UNESCO World Heritage** Site.
- Lakes in the areas were **very clean and neatly maintained**.
- Tried to understand Shinto philosophy

Day 6: India - Japan Education Exchange Meeting

13.10.2018

- Had a great opportunity to have **one to one peer learning** and exchange from teachers from both sides
- Got an opportunity to know **case studies on ESD** through presentations.
- Explored the **challenges and issues common to both the nations** with regard to the education system.
- Had an opportunity to view a presentation on **India-Japan cultural relations.**

Key Take Away for Us

- Enhanced understanding about the **Japanese Educational System, its policies and National Curriculum Standards** among the visiting teachers from India.
- Better understanding about the **educational system of India among the Japanese Teachers**.
- Improved understanding of **ACCU's efforts in promoting ESD through international exchange programmes**
- Greater emphasis **on integrated education**
- **Vocationalisation of Education** from Class IX with desired facilities.

- **Availability of sports infrastructure** and its effective use at School level.
- **Stress free learning environment** in the Classrooms.
- **Punctuality, commitment, dedication** Meticulous planning and implementation towards imparting quality education in school
- Efforts **made to Implement ESD Practices and Initiatives** as a means to achieve a sustainable and peaceful society where diversity is mutually respected.
- Irrespective of development, **has more forest covers**
- **Special attention** for special need students
- Exclusive **Super Science Schools** in every district of our country

Things that we can impart to Japan schools

- Collaborate **with India on Open and Distance learning education both in academic and vocational**
- Impart **Vedic mathematics – Mental mathematics**
- Introducing **Yoga and elderly care as a subject**.
- **Doctor on call facility** for students.
- Regular health check-ups every fortnight and their documentation.

Gratitude

- The Indian Delegation is extremely thankful and expresses its gratitude for the Staff of ACCU, MEXT, Teachers and Students of Japanese Educational and Cultural Institutions for extending such great hospitality and opportunity to the Indian Delegation and Indian Embassy.

Thank You

付録３　これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2016 年 11 月 6 日～13 日	東京都、千葉県	14 名
2017 年 11 月 5 日～12 日	東京都、静岡県	15 名
2018 年 10 月 7 日～14 日	**東京都、神奈川県、山梨県**	**14 名**

計 43 名

※　2016 年度から 2017 年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018 度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

文部科学省委託 平成３０年度初等中等教職員国際交流事業

インド教職員招へいプログラム　実施報告書

2019 年 3 月

編集・発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　(03)5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Waco Inc. [120]
ⓒ2019　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)

Think Globally, Act Locally

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター